

# 福岡市美術館 研究紀要

## 第13号

---

### 【資料紹介】

満州の甲斐巳八郎 雑誌『協和』掲載挿絵・執筆記事 ⑦ 中山喜一郎 1

美術館と中学校美術部の長期プロジェクトから考える美術館の学び  
崎田明香 15

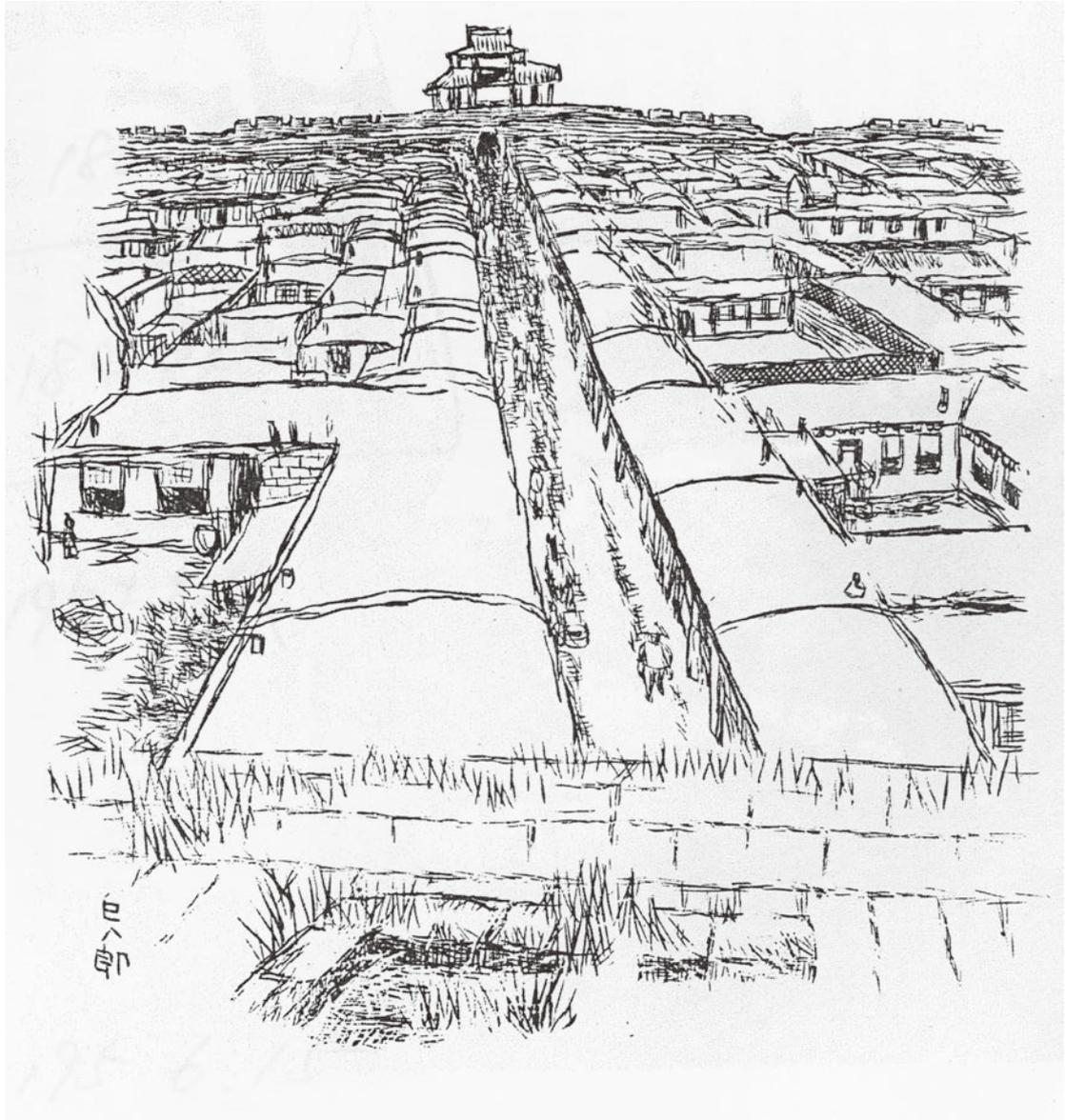
### 【報告文】

吉田博《(題不詳)》保存修復処置報告  
—美術館内環境を利用した変形修正の可能性— 渡抜由季 26

『雲中庵茶会記』翻刻稿 ⑨ 後藤 恒 47

2025年





口絵 1

甲斐巳八郎 満州郷土画譜83 熊岳城々内



口絵 2

吉田博 《(題不詳)》 修復後 画面・全体図・正常光 (額入)

## 【資料紹介】 満州の甲斐巳八郎 雑誌『協和』掲載挿絵・執筆記事⑦

中山喜一郎

### 解題

第191号（昭和12年4月15日発行）の「満州郷土画譜79」から、第200号（昭和12年9月1日発行）までの執筆記事と作品を掲載している。ただし第200号は途中までとなった。

昭和12年9月に、「満鉄沿線郷土玩具案内」を共同執筆した須知善一らとともに結成した「満州郷土色研究会」から冊子『苦力素描』が発行されている。6人ほどの画家が参加したが、当然ながらその中心は巳八郎である。本稿は『協和』掲載の作品や文章を紹介するものなので、『苦力素描』をすべて紹介できないが、ここに巳八郎作品の一部を紹介しておく（国立国会図書館蔵本による）。



左は表紙。右は「苦力長屋」と題された巳八郎の文章とともに掲載されている。画中には「撫順 苦力運搬汽車」とある。興味深いのは「6.6.15」の日付である。巳八郎が『協和』に登場し、苦力を精力的に取材していた最初期、昭和6年6月である。その場で描いた生の素描がもつスピード感や臨場感にあふれ、6年前に『協和』に掲載されていた挿絵も素描風ながら、実は細かに整えられていたことが理解されるだろう。

（なかやまきいちろう 福岡市美術館 総館長）

### 凡例

- 1 甲斐巳八郎の挿絵や記事が掲載された『協和』の号数（発行年月日）を見出しとし、掲載順に配した。掲載ページは省略した。
- 2 自筆記事、挿絵や作品には通し番号をつけてNoで示した。最終的には、Noは『協和』に掲載された全作品点数とほぼ一致する。
- 3 活字化されたタイトルや署名などがある場合は、Noのあとに [ ] で記した。ない場合は、[なし] とした。
- 4 活字化されたタイトルや署名とは別に画中に文字や署名があり、判読可能な場合は「 」で記した。
- 5 ルポルタージュなどの自筆記事は、タイトル等のあとに全文を掲載し、挿絵をそのあとに配したが、紙面の効率上、先に挿絵や写真等を掲載する場合もある。文章の旧漢字、旧仮名遣いは意味が異ならないかぎり現代表記に改めた。地名、固有名詞等はそのまま記した。原文は、グラビアページの文章以外はほぼ総ルビであるが、本稿では必要に応じて一部を残し、他は省略した。明らかな誤植は（ママ）としたが、意味が通じる範囲で訂正しなかった。
- 6 作品や記事の理解の助けとなる情報、語句解説などは、適宜\*印で記した。
- 7 挿絵は原寸ではなく、それぞれ縮尺は異なる。
- 8 原本の文字が縦組の場合も、本稿では横組とした。

第191号 (昭和12年4月15日発行)

No. 203 [満州郷土画譜79 衣服 一男一]

現在の支那服は満州朝が漢民族を征服した時、帰順の証拠として男子に辮髪させたと同時に、男は服装も改めた為、悉くが満州人の服装であるが、女子は昔の儘の漢人の服装を慣用している。蒙古人も、清朝に属していたので服装は殆ど似通ったものであるが、北方に住むオロチョンのなかでも、川オロチョンと言われている河岸に住むオロチョンは、川魚の皮を今日なお常用しているなど、原始生活を現今に持続している珍しい一例であろう。もっと古い時代には羽衣が唯一の被服であったと言われているが、次の時代に羽毛が毛皮に変わり、今日棲林族のオロチョンが着用しているのは、その頃のまゝを慣用されているものではなかろうかと思われる。

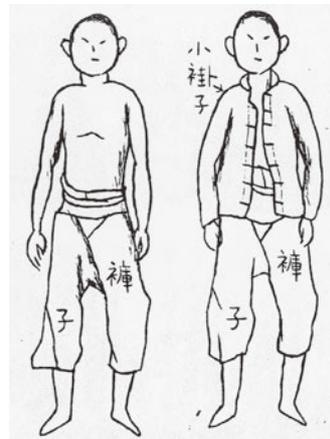
長い時代に民族興亡は広範囲の地域に亘って繰返され、服装も今日の支那服となるまでには幾度か変化に変化を重ねてきたものであろうが、服装の変遷については十分な調査が遂げられていないので知ることができない。

支那服は実用衛生の上から見て、世界中で一番合理的に出来上っているとわれ、体裁にしてもいま一息の工夫が加えられたら、女子の被服としても見事なものが想像され得る。日本や西欧の衣服に較べると、日本服は寛大に過ぎ、洋服は緊搾されていて各欠点があるが、支那服は恰度この中間を生かしてあって、冬は暖かく夏は涼しく、頗る簡便に出来ている。また如何なる模様、色合のものも無制限に自由である点と、型も日本服や洋服よりも勝手に変えることの出来る自由さがある。それでついでながら満州の郷土化運動中最も緊急な日本婦人の被服の改良を、一日も早く支那服のもう一段の工夫によって実現されたいものである。

次に現在一般に着用されている支那服は下着に裤子(ズボン)を先ず着用し上に小褂子(下着)を着る。最近この二つはメリヤス(満州では衛星着と言っている)が流行してから半々位に着用されている。次に套褲はズボン下即ち裤子の上に着るもので、ズボンの上部両側後部を斜に裁断した様な形で、恰度日本の小児の股引に似ている。種類は単、裕、縮入、毛皮の四種で裏毛のついたものもある。苦力の如きは冬でも素裸身の上に直ぐこの套

褲を着用している。付属品としては足首を縛る套褲帯タネケウタイがある。次は日本の胴着に類するもので襖アオというのがある。これにも裕、縮入、毛皮製などがあり、この上に外衣として、袍子や馬褂バオツを着る。夏分なら長褂子(大褂子)を着る。これは単物ひとえにきまっている。袍子は長褂子の冬物で、やはり胴衣のように裕、縮入、毛皮裏製の種類があり、馬褂マブツは日本の羽織に相当するもので、長さは腰の辺りまで、近来は着用するものが少なくなったように思われる。それから最近これもあまり用いられないが、日本のチャンチャンコとか袖なしに類する背心ベイ子カンチエヌルまたの名を坎肩カンチエヌル児というのがある。種類は単、裕、縮入、毛皮の四種。襟が対襟トイチヌと言って普通のチョッキのように前の中央で合わすものと、ダブルチョッキのように横で合わす大襟ターチヌとの二種類がある。猿股や禪のようなものはもともとしないのであるが、この頃では中流以上の階級になると洋服との二重生活をし、メリヤスとか猿股を常用するようになって来ている模様である。(巳八郎)

No. 203-1~5



No. 203-6 [清朝時代の官服一例]



\*No. 203-6 は図中の書き込みにあるように『清俗紀聞』(江戸時代寛政年間に長崎奉行によって編纂された図版が数多く掲載された聞き書きで、内閣文庫本などの同図は美しい手彩色があるが、本来は巳八郎が写したような線描の墨版のみ)を写したもののだろう。文字も含め細部まで原本に忠実に写しているが「藍雲緞肩文武各官司」には文字が抜けている。正確には「藍雲緞(披)肩文武各官司」である。ただ、庶民的な服装の記述になぜ上級の官服の図を入れたかは説明されていない。

\*No. 203-9~14の写真は巳八郎が撮影したのではなく、なにかを複製したものではないかとも考えられ、印刷も悪くて詳細がよくわからないが一応掲載した。

第192号(昭和12年5月1日発行)

No. 204 [満州郷土画譜80 結髪 一女]

男の場合には満州人が漢人を辮髪させたが、革命は逆に漢人が満州人を降服し、迫害を逃れる為に満州人女は結髪を漢人に似せて避難したと言われ、その為に満州古来の旗粧と言われる、即ち両把兒頭、一把兒頭、架子頭等の結髪は漸次行われなくなり、今日ではほとんど廃滅に近い状態である。以来漢人の勢力は文化から風俗まで満州人を漢人化し、稀に婚礼とか廟会などに見ることがあっても、そのなかには満漢何れとも判別の出来ないものが多いようである。

支那の結髪のはじまりは燧人氏という婦人が羊毛で髪を結び、竹を笄としたと伝えられているそうである

No. 203-7~8 [写真2点] [長褂子] [上衣は馬褂兒]



No. 203-9~14 [写真6点] 右上 [小褂子] 右下 [馬褂子] 中上 [棉襖] 中下 [■襖] 左上 [褲子] 左下 [套褲]

が、竹を使用しているから、これは南支那の伝説ではないかと思われる。何と言っても支那は大国であり、その上に多種民族の寄合世帯であって、天下は次々に異なった民族が覇権を握り、結婚も服飾と同じく複雑多様を極め、結髪も歴史的に遡っての考察は困難なことである。

小兒から順序を追ってゆくと、生まれて三日目に男女ともその生毛<sup>うぶげ</sup>を剃る風習がある。これを剃胎毛<sup>テイタイマオ</sup>と言って、剃った胎毛は日本の臍の緒と同じく大切に保存し、これを枕の下に敷くと病魔除になるとされている。それから一ヶ月足らずして剃髪をすると、半年もすれば真黒な毛が生ずる。支那人に比較的赤毛のないのはこれが為ではないかと言われている。次に前頭部に円形か方形の毛を残し、その周囲を剃り落す。円い方を桃子式、四角の方を四方式と言っている。猶漸次長くなるに従ってその先を赤糸等で結び、可愛いお河童さんが出来るのは日本とよく似ている。生後一年も経つと髪の毛も稍長くなるので、月代を剃り、その周囲に幅二寸程の形に髪を残す。これを劉海髪<sup>リュウハイフマー</sup>という。四、五才位になると三ヶ所にも五ヶ所にも短い毛を赤紐で結んで上方或いは横にピンと立てゝいるのをまだ田舎では見うけることがある。十歳にもなると、日本のお下げ<sup>おさげ</sup>のように横或いは頂<sup>てつ</sup>ぺんから長く垂れている。十才を過ぎると二本三本というのはない、一本きりである。お下げの日本と異なった点は前髪の短毛を前額に垂らし、種々の形で劉海髪を残し生かしていることである。お下げは十七、八歳の嫁入前まで続けられるが、ただ赤紐で結ぶのが唯一の髪飾りの用をなし、よほどの近代かぶれでない限り娘時代は造花を挿したり、髪をちぢらしたりするものはない。一度結婚すると古い形式ほど頭髪を飾るのが習慣になっている。最近では簡単な束髪が多いようであるが、束髪していても前額の垂髪は残したものが多く、次に額を深く剃り上げて鬢のような髪をしているのがあるが、これは嫁入すると日本でおハグロ<sup>おハグロ</sup>といって歯を黒く染めたと同じような意味で、額の生毛<sup>ハオマオ</sup>（毫毛）を抜く習慣を行ったものである。額の生毛を抜くことを開臉<sup>カイリエン</sup>と言っている。以上が現今満州人漢人の間に一般に行われている結髪である。

漢人の古い結髪は満州人の旗粧<sup>ハンチョワン</sup>に対して漢粧と言っ

て現に喜鵲尾兒、天寶鬢兒、平三套、高冠兒等が残っている。

蒙古人は至極簡単で、未婚者は前額を中央に分け後頭でその残余の分を辮髪にする、既婚者は旗に依って多少の相違はあるが、やはり未婚者のように前額中央で二つに分け、二分した髪を一つづゝ編んでその端を折畳み、中央を緊く結び、耳後に垂れ、笄を横に挿し、珊瑚珠の根掛けに類する長いものを髪に巻きつけ、後頭部には金属の装飾を垂れる。他に二本のお下げを左右から胸部に垂らしているものもある。しかし半漢民族化した蒙古人は束髪に結っているのもあり、一見漢人と見違え易い。

都会地に住む漢人の髪は世界各地の風習と流行をとり入れたと言ってよいくらい千差万別で、年齢により、階級により、職業によって異なるところは何処も変りがない。(巳八郎)

No. 204-1 中央「蒙古人」左上「喜雀尾頭（漢人）」  
左下「鬼兒愁」右上「愛似頭」右下「雙辮頭」



No. 204-2 ~ 20 [写真19点] 左から順に [旗頭(満)] [髻々又は圓頭(満)] [兩把兒頭(満)] [長頭(満)] [叉字頭(満)] [長頭(満)] [八旗頭(満)] [劉海(二歳)] [大辮(十三歳)] [劉海(四歳)] [元寶頭(二十四、五歳)] [歪毛兒(五歳)] [元寶頭(二十六、七歳)] [三門角(七歳)] [盤頭(三十歳)] [劉海(八歳)] [燕尾剪頭(三十五、六歳)] [中分辨(九歳)] [頂盤頭(四十歳)]



\*風俗研究家ならいざしらず、画家による髪の結い方に関するレポートとしては相当に詳細で、好奇心旺盛な巳八郎らしい。本来であればすべて自らのスケッチで構成したかったのかもしれない。写真の大半も、年齢の書き込みなどから彼自身の撮影と思われる。

第193号（昭和12年5月15日発行）

No. 204 [満州郷土画譜81 農家]

古史考に「巢氏あり気を構えて巢となす」とあるから、支那人も昔は樹上に巢食っていたものらしい。ものものしく歴史に出てくる皇帝なども、二千年も遡ると、今日からは想像も出来ぬほどお粗末な宮殿に住んでいたに違いない。今日未だ穴居を営む地方があり、天幕を持って移動する遊牧民族がある大国のことだから探せばいくらでも二千年三千年昔の形態を残している住居を見ることが出来るだろう。

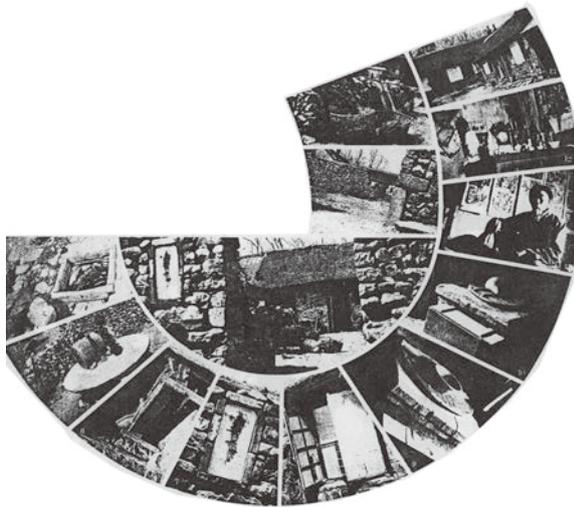
先ず手近なところから、南満の農家を拾ってみた。場所は大連大正広場の電車停留所と、大西山貯水地の中間、屋根の黍殻の他は悉く石で固めた南向きと同じ構への、如何にも実利本位に作られた十軒余りの小農部落である。部落の前道路脇に共同井戸と同じく共同の躰があってよく整頓された否美術的部落は、石でうち固めた火事には強く、箱のようなつくりは安上りで、泥棒にも要塞堅固に構えている。

突っつきの門と言っても、ただ人の通れるだけに石垣が途切れているというていもの、左に「泰山石敢當」の悪魔除けがあり、門をくぐると左右に物置、右物置のお隣りが馬小屋、お次が側堂（めかけ）になっている。側堂は本来ならば側室（めかけ）の部屋であるが、ここでは家長の弟か息子夫婦らしいのが住んでいる。正前は正堂と言って家長の住むところ、ここは正面の戸をはいると真暗な部屋の右左隅に二つの釜があり、東隣りの部屋は客庁と言って主人が住み、客を迎える一番大切な部屋でもある。西隣りの部屋は別棟の側堂より一階級上のものが住む部屋で、一家のうちに家長の弟と息子が居た場合は、弟がこの部屋に住み、妾なら第二夫人が住むということになる。それから再び正堂を外に出て庭の西側にまるい石を畳んで石垣にした豚小屋があり、隣りに表に寄って物置、或いは物置が馬小屋となっている家もある。それと前庭を持っているのがこの部落に二軒あった。前庭とは物置と大門の間に石堀がつくられ、これを二門と称して、この間に相当ひろい庭がとられてある。 巳八郎

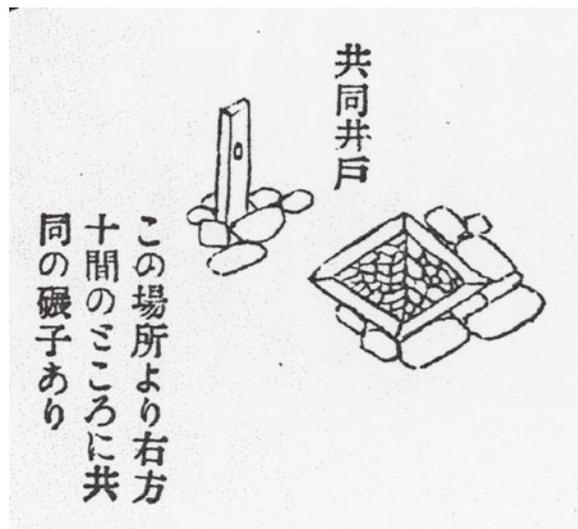
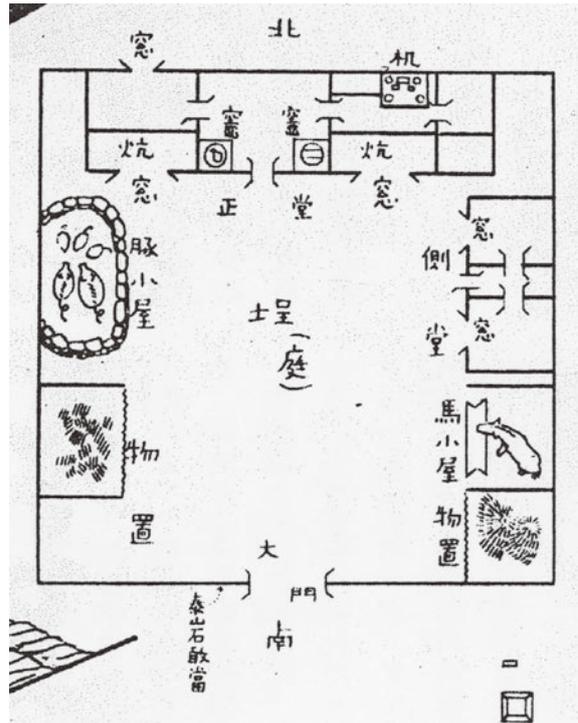
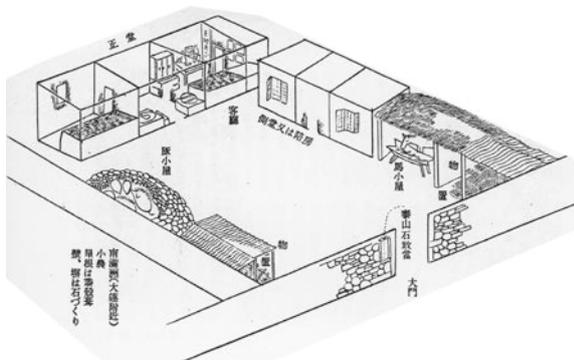
\*黍殻（キビガラ）とはトウモロコシの茎の皮を剥いだ髓のことで、模型などを作る材料として用いられる。藁（わら）のように黍殻で葺いた屋根の意味だろう。

\*以下の写真13点は全体が半円になるように変形トリミングして配置されている。番号が振られたネーム一覧があり、その順序は、内側の右上からその下、中心の半円、外側左側から右上までの反時計回りの順になっている。1点づつ掲載すると相当にスペースを消費するため図版としては小さくなるが、ページのレイアウト自体も巳八郎のデザインであると思われるので全体を掲載した。

No. 204-1 ~ 13 写真13点 [1 石で畳んだ豚小屋] [2 前庭のある農家] [3 「石敢當」のある石づくりの農家] [4 共同井戸] [5 共同用の碾子] \*碾子は石臼のこと [6 馬小屋と秣入] [7 石門の向って左側につくられた魔除] [8 窓の一例] [9 竈] [10 竈] [11 正堂 東隣の客庁] [12 11の炕と向かいあっている床] \*炕はオンドルのこと [13 向って右側が東側の側堂と物置、正前が正堂]



No. 204-14 ~ 16 図面と説明文\*図に正堂や豚小屋、馬小屋などの名称が記入されているが省略する。



第194号 (昭和12年6月1日発行)

No. 205 [満州郷土画譜82 民家]

大連近江町に二十年から居住する親子四人の、月収六十円の印刷工 (日本人経営) の住居である。漢人は日本文化の蔭に僅かに自分達の生活を営んでいるのが大連の現状であるが、異なった民族がながく一つところに生活する社会は何時の間にかお互いのものが家庭生活にまで及び、容易に自分等の習俗を変えぬ漢人も、一步一步が日本的になってきているのを見逃すことは出来ない。殊に大連は日本文化を最も色濃く建設した、

満州の代表都市であるから、同じ民族でも特に大連の漢人の民家として見ていただきたい。

住居は裏店の安上りの六畳位の二間きり、周囲は同じくバラックに近い安普請の支那家屋が、ビッシリ背中合せに建ち込んで、じめじめしていて如何にも不潔を思わせる。

家の表はやっと歩行の出来る二尺ばかりの路地で、路地を隔てた向かい側は他の家の背面になっていて、炊事場はこの背中に喰いついて、お粗末な雨漏りしない程度のものがつくりつけてある。炊事場は今一つ簡易になると、居室のなかにつくられ焚く火は炕床の炕に利用されているのがある。

上図に示しているように、右の入口をはいると接客兼子供の部屋があり、下図に見える舗が子供二人の寝台になっている。隣りが主人夫婦の居間で、どの部屋もまず戸袋がないのが目立つ、それで家のなかにある悉くものがさらけ出ている。安物ばかりの調度であるが、軸物から鏡、椅子などが整然と配置よろしきを得ているのは心よい。しかし一切切切がシンメトリックに並んでいるのが、日本人には一寸堅くるしい。

この穴倉式不衛生家屋も、別の意味では盗賊にそなえよく、安上りに出来る点、またこれほどヒシヒシ押し寄った都会地の家屋に火事が少ないのは、用心もさることながら、使用されているものに木材が少ないのもその要因であろう。

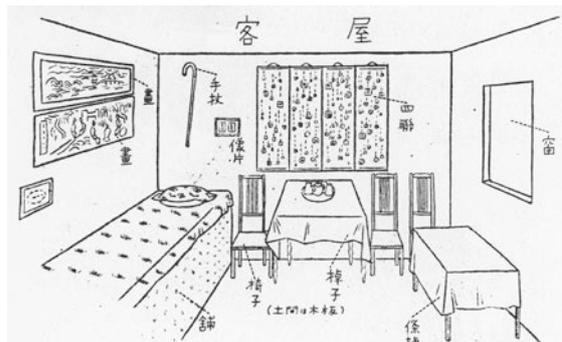
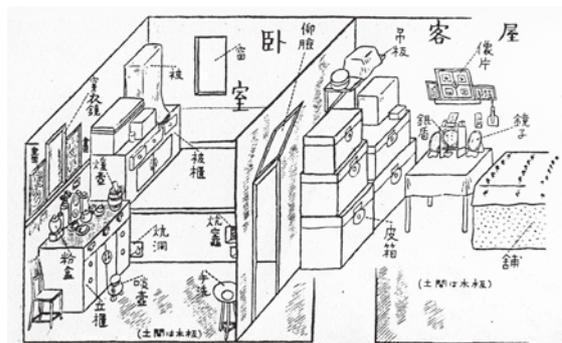
室内に入って突き当たりが一番美しく飾られているところ、そこには必ず鏡が置かれているのは、外来者への見得と、鏡は悪魔除けを意味し、考えくるとなかなか実利本位に出来上っているようである。

彼らは夏間になると、穴倉のような部屋のなかにいるのをさけて外に出て涼を入れる。それで満人街の夏の夜の歩道は歩きもならぬ位である。しかし冬間の厳寒を考えると、夏の暑さは南満なら風があるので外で過ごすことができるが、寒さにはどこまでも寒さに勝つだけの設備を加えなければならぬので、都会地に住む満人の住居が不衛生であるのは、収入などから考え無理のないことでもある。 巳八郎

\*給料の額や詳細な取材、遠慮のない表現からして『協和』を手掛ける印刷工の家かもしれない。

No. 205-1~2 「客屋」「臥室」\*図に室内のあれこ

れについて名称が書き込まれているが省略する。



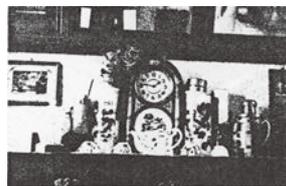
No. 205-3~11写真9点



205-3 [路地裏入口]



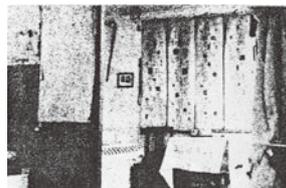
205-4 [客屋より臥室の正面を望む]



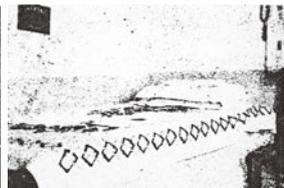
205-5 [臥室正面の飾り]



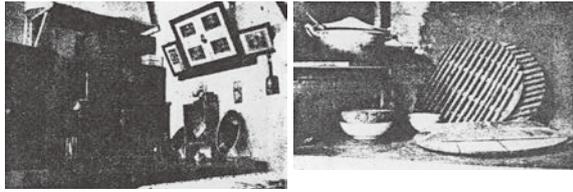
205-6 [臥室の炕床]



205-7 [客屋正門の四聯]



205-8 [客屋の舗(寝台)]



205-9 [客屋の皮箱その他の飾り] 205-10 [厨房の簾子と窯]



205-11 [厨房の水瓢と水缸] \*水瓢は瓢箪を二つに割って作った水ひしゃく。水缸は水がめのこと

第195号 (昭和12年6月15日発行)

No. 206 [満州郷土画譜83 平房子 (ピンファンズ)]

一見なんの変哲もない、マッチ箱を並べたような家屋であるが、あまりにも変化のないのが却って特徴となり、卑近にみられる満州色豊かなものとして、囤積と共に第一にあげるべきものであろう。南満では瓦房店、萬家嶺、松樹の付近は列車の中から平房子ばかりの街が見られ、満鉄線を北行すると次第に少なくなってゆくようである。私の見た範囲では、西は洮南から北に進めば齊齊哈爾の泥土で固めた平房子、東の奉天線方面は至るところに、これも泥土のものが多い。城市としては山海關、錦縣、熊岳城など城内の家屋の殆どが貨車の連続したのを見るようである。北支は山西省のずっと田舎に至るまで平房子があるが、満州は駅付近か鉄道の沿線に近いほど多く、遠ざかれば見当たらなくなってくる。

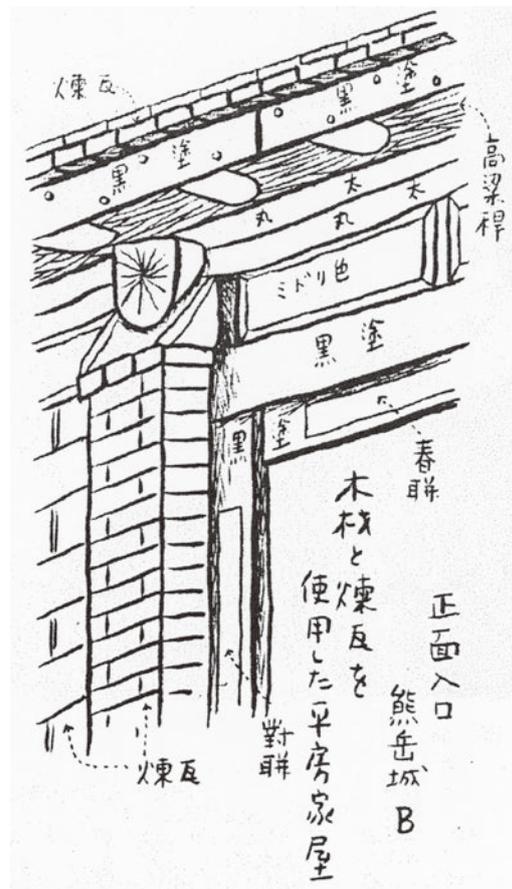
今日では恰も満州特有の住宅であるかの感さえ抱かせる平房子であるが、支那住宅志に村田治郎氏の書かれたのを見ると、『平房は満州現在到る處に見え満州固有の住宅形式であるかのように考えらるゝが自分の見たところでは、元来満州には見なかった形なので、その証拠は今から百五十年許り前(乾隆四十五年)に朝鮮の使が満州を通過した時、是に随って行った文人が、後に熱河日記を著したが、そのなかに現在

錦州近くのある村から「無背の屋」が始まったと記している。即ち鴨緑江を渡り、鳳凰城、奉天、遼陽と進んだ連中で、未だ見なかった平房が錦州に来てはじめて見えたというので大変珍しかったのだろう。…』

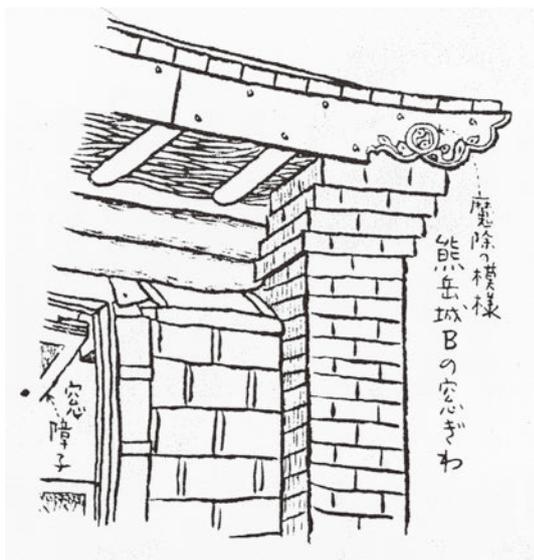
右のように述べ、更に、『つまり平房は北方漢人種の文化を表徴するものであって、満州朝廷の中期以降に流れ込んだ開墾移民と共に盛んになったもので、満州古来の住宅ではなかったのである。構造を見るに、大きな木材を要せず、泥土をかためた日乾煉瓦が重要な材料であって、これは煉瓦又は粘土によって作る必要のある地方から発生し、且つ流行する形式である。この事が現在の満州でも明瞭に判って、木材の少ない地方に平房が多く、吉林、安東などの様な木材の多い處では、是は余り行われぬのである。…』

と記してあるから、満州に平房がかくも至るところに分布されたのは実はせいぜい百五十年そこらの歴史しかないと思なければならぬ。 巳八郎

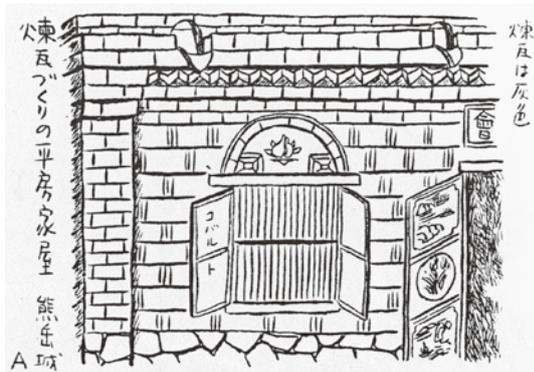
No. 206-1 「正面入口 熊岳城B 木材と煉瓦を使用した平房家屋」 図中の説明は省略



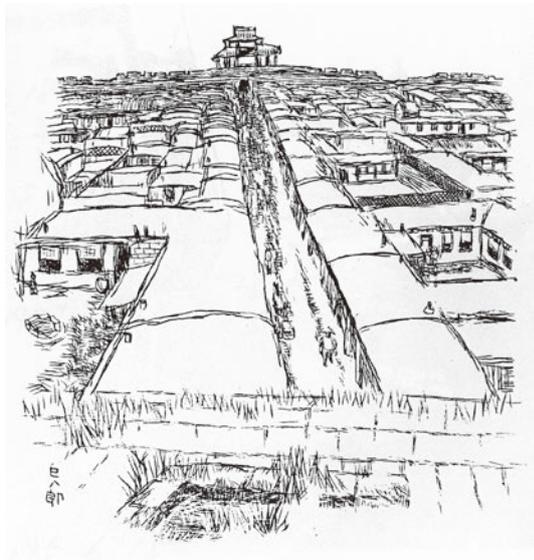
No. 206-2 「熊岳城Bの窓ぎわ」 図中の説明は省略



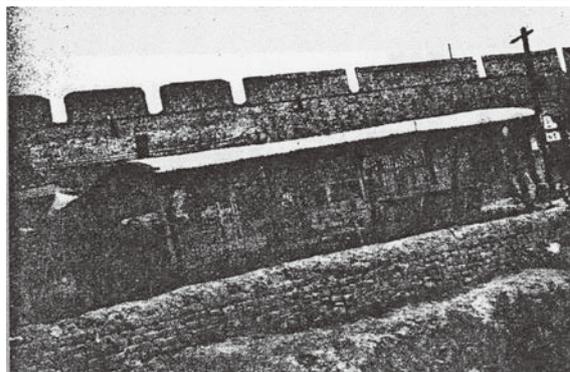
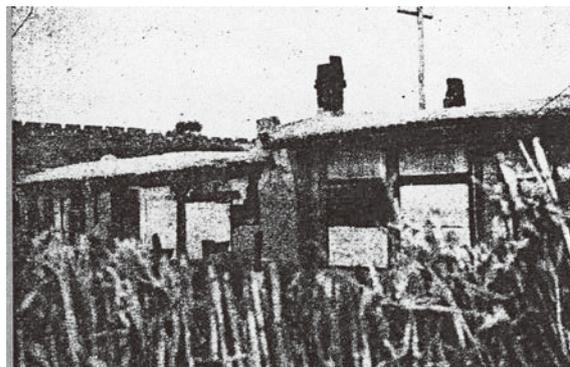
No. 206-3 「煉瓦づくりの平房の家屋 熊岳城A」



No. 206-4 「熊岳城々内」 「巳八郎」



No. 206-5~8 写真4点 [写真上三枚・海城・下蘆平]



第196号 (昭和12年7月1日発行)

No. 207 [満州郷土画譜84 旧家]

満州の旧家としては決して代表的なものではないが、一頃張作霖が住んでいた家でもあり北平転出後は東北

軍の官房になっていたという興味も手伝って、写しとってみた。家はせいぜい百年までのもので張作霖は先住者から買いとったものだとされている。隣りは揚宇霆が殺されたので有名な、もと学良の洋館が現在満州国国立図書館になっていて、この家のなかに四庫全書が一杯詰っているの、室内は往時の跡を見ることができないが、他は東北軍閥時代のまゝ残っている。

使用されている建築材料は、煉瓦(灰色)と石(主に黒)が目立ち、木材、瓦が既定の場所に在る他は漆喰の類は殆ど使用されていない模様である。

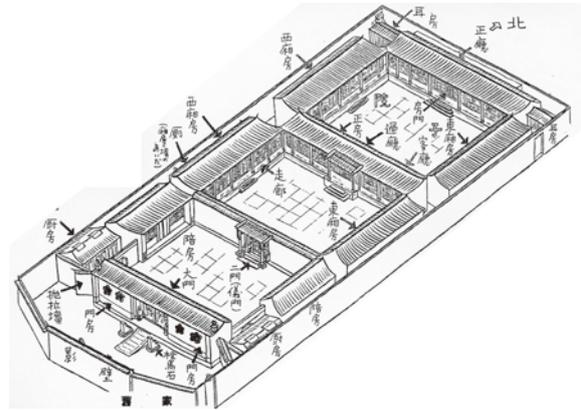
正面の影壁横の入口から順次奥を覗てゆくと、大門と向い合って大きな影壁があり、影壁の正面に小さな縦形の枠に赤で「鴻喜」の文字が目立つ。文字の両脇に下馬石があり、この前の大門には、表扉に見事な門神が描かれている。門前には栓馬石が二つ、大門の両側には門房(門番または親戚友人を住ませる)、門房から斜前に抛拉櫓が突出している。大門を過ぎると次の二門(儀門とも称す)。この間石畳の院子の東西には同じ形の厨房陪房がある。儀門の表扉(大門に向って)には蝙蝠の絵、裏扉には「壽」の文字を図案化して描かれてある。儀門は大門の扉とは全く違った位置と違った形をしているので扉とは言えないかも知れぬ。儀門を通ると再び院子で、東西に廂房(廂房には近親者または蓄妾を住ませる)がある。儀門と向いあったところが過廳(過廳は部屋を通過するという意味で、第三番目の門)東側が客廳(応接室)、西側が正房。過廳をくぐって次の院子に出ると、東西に廂房(前と同じ)正面が正廳、入口を房門と称している。正廳は主人の部屋で、正廳の両翼が耳房と言って台所下男、下女の部屋になっている。

正廳と扉との狭い場所には板で安値なこしらえのボーイ部屋があり、西廂房裏の扉との狭い空地には、これも粗末な、この家とは凡そ不釣り合いな便所がある。

他に見過ごすことの出来ないものに、走廊の柱の台石である柱礎の彫刻と、窓下の走廊に接した腰壁が黒い石で張られ、これに花模様の浮彫が施されたのがあり、今一つは窓の上に通風器らしい、紙張りの日本の行燈を思わせるものに、没骨で描かれた草花が、一つも破れずに残っていた。 巳八郎

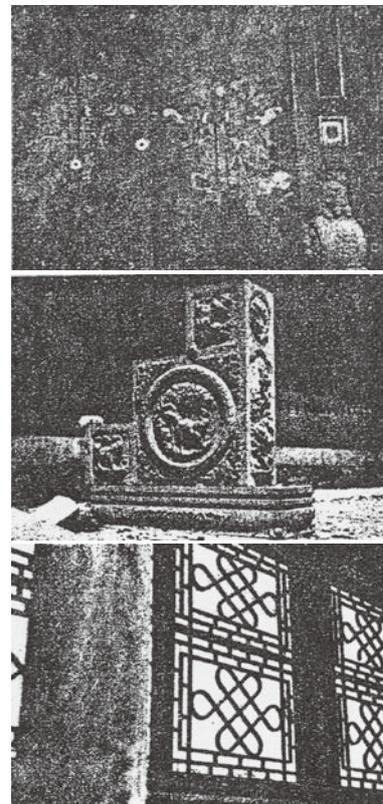
\*揚宇霆は清末民初の軍人。北京政府奉天派に属し、張作霖が関東軍に爆殺された後は張学良と権力争いを展開したが、1929年(民国18年)1月、張学良に緊急逮捕され、即座に銃殺に処された。

No. 207-1 [旧家] 図中の説明は省略



No. 207-2 ~ 13 写真12点(全部で16点あるが、巳八郎が撮影したと考えられるものだけを掲載した。印刷状態が悪く、暗部はぼつぼつれている)

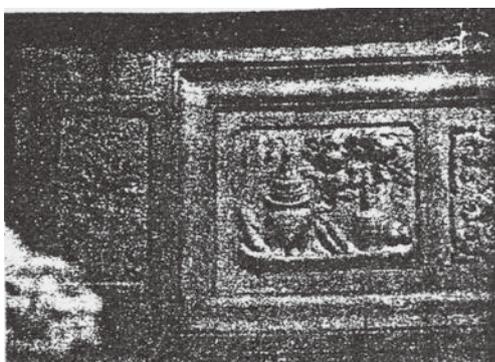
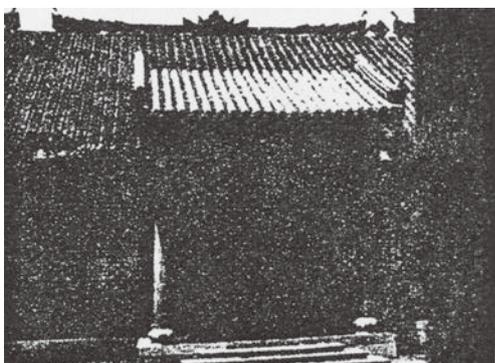
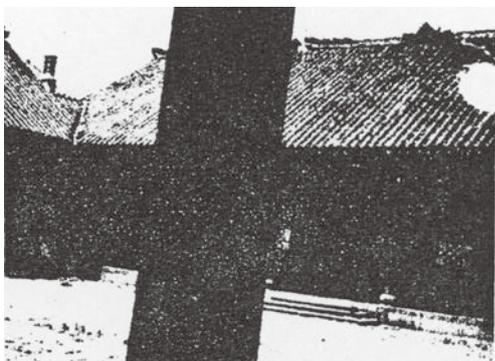
No. 207-2 ~ 4 [上より・大門にえがかれた門神・大門前の栓馬石・廂房や正房の窓枠の模様]



No. 207-5 [西側耳房の通風器 (紙張りの日本の行燈のような趣がある)]



No. 207-6~8 [上より正廳、正面を房門と言う・過廳・正廳窓下の黒い石に刻まれた花模様]



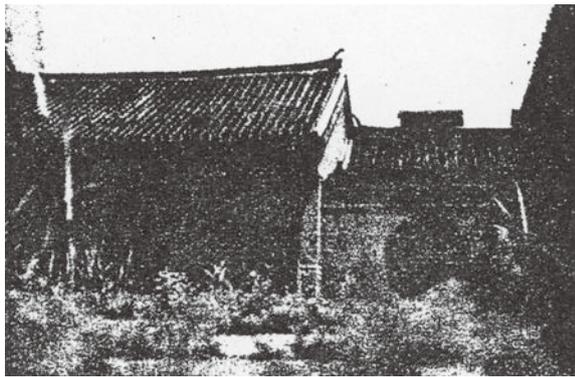
No. 207-9~11 [上より・東側の抛拉檣・儀門・走廊]



No. 207-12 [影壁と上馬石、左側長方形の枠には鴻喜と書いてある]



No. 207-13 [東側の陪房と厨房]



第197号 (昭和12年7月15日発行)

No. 208 [満州郷土画譜85 厨房]

厨房のはじまりは、太昊伏羲が帝となって、民に熟食を教えたのにはじまっていると言われていいる。それまでは、生物を食わぬ支那人も生物ばかりを食っていたので厨房の必要がなかったのであろう。

厨房は家の大小、家族の数、貧富に依り、地方風土気候で異なっているのは建物の場合と変わりはない。写真は奉天城徳勝門外に在る、満州旗人王氏(現安東省長)の厨房で、建物は新しく、満州建築の特徴は殆ど皆無と言ってよい位、漢人の好みで、厨房もまた同様であるから、漢人上層階級の台所として扱いたい。厨房の隣室は厨子夫婦の部屋でこれ位の家になると、厨子、門番を養っている。

イの下二図は蘆平城外に住む間借人の四十を二つ三つ越した独身者の部屋で、粗末ではあるが独身者でも年とっている為か、整頓の行届いた点は日本人の間借して炊事している独身者と比較して見ると興味がある。尤も同じ間借でも、日本は襖一重の隔りで、同じ玄関に下駄をぬいで、一つ家に住むのであるから、日本家屋の間借人の炊事と言え、言わば屋上屋の炊事場で、この点大いに異なるところがある。

料理に多くの油を使用する為、厨房内部が燻っているのは当然であるが、どんなところを覗いて見ても日本の田舎の旧家に見るような、磨きのかかった竈は見たことがないが、満州旗人の古い家には日本の台所に似通ったものがある、非常に美しいと聞いているので次の機会に見て置きたいと思っている。

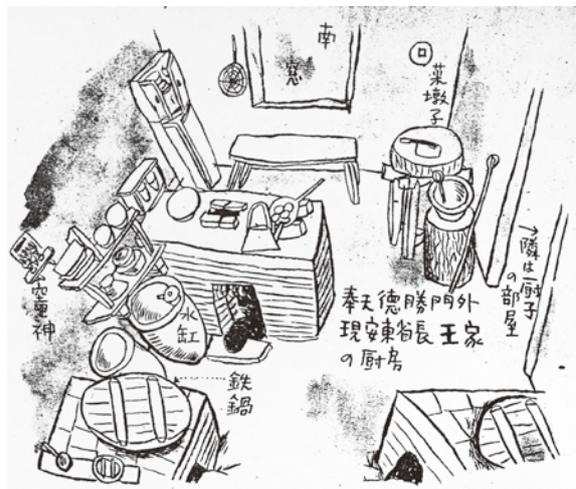
竈神を祀るのは元来漢人のものであるが、王家の厨

房にも漢人の家に見る竈神が祀ってあるから、漢人との接触の長い歴史は建物と同じく漢人の習俗に倣ったものであろう。

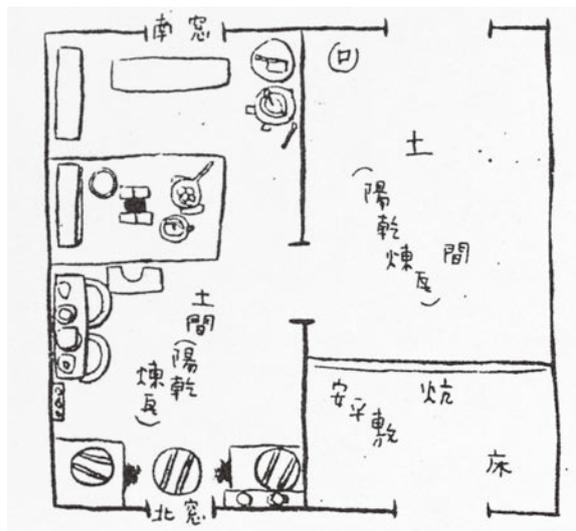
燃料もところに依り家に依って違うが、王家に見るような、丈の高い方の竈には練炭を焚き、低い方の鉄鍋のかゝっている方には高粱稈を焚くのが普通である支那料理屋のような、燃料の多く要るところでは普通の泥と粉炭とをショベルに半々に入れて竈にほり込んでいる。巳八郎

No. 208-1 「奉天城徳勝門外現安東省長王家の厨房」

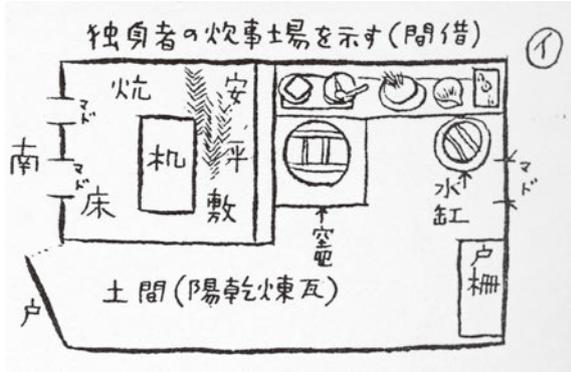
画中の説明は省略



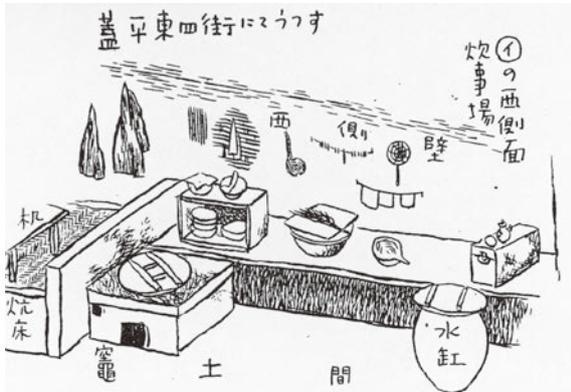
No. 208-2 (平面図) 図中の説明は省略



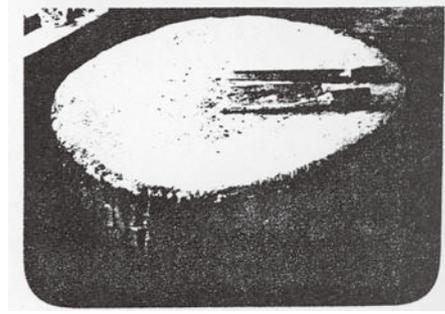
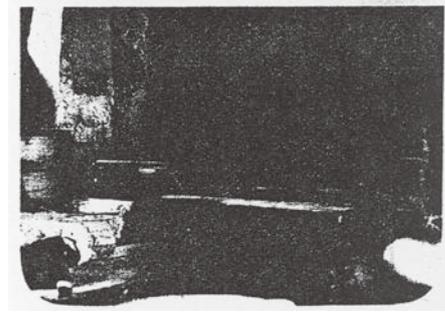
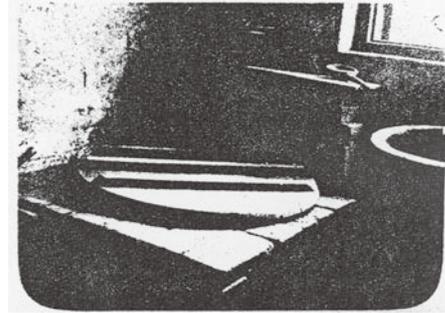
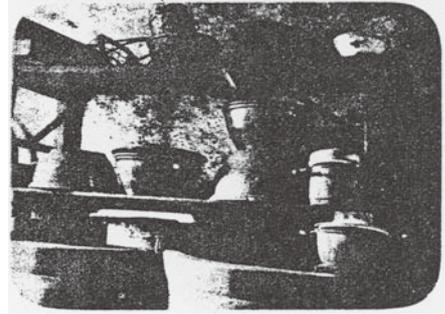
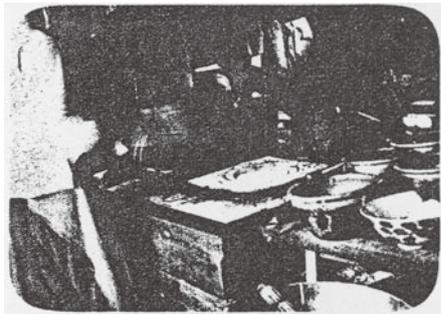
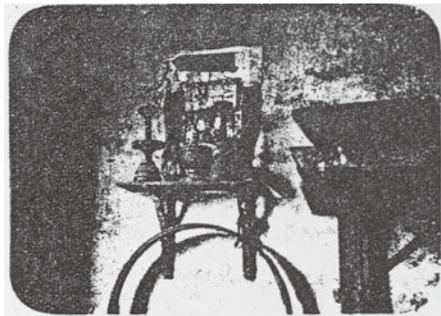
No. 208-3 「独身者の炊事場を示す(間借) ①」 図中の説明は省略



No. 208-4 「蘆平東四街にてうつす」 「①の西側面炊事場」 図中の説明は省略



No. 208-4 写真6点 説明はないが、おそらく前半3点が王家の台所で、後半3枚が独身者の台所



第198号 (昭和12年8月1日発行)

No. 209 [満州郷土画譜86 金州城]

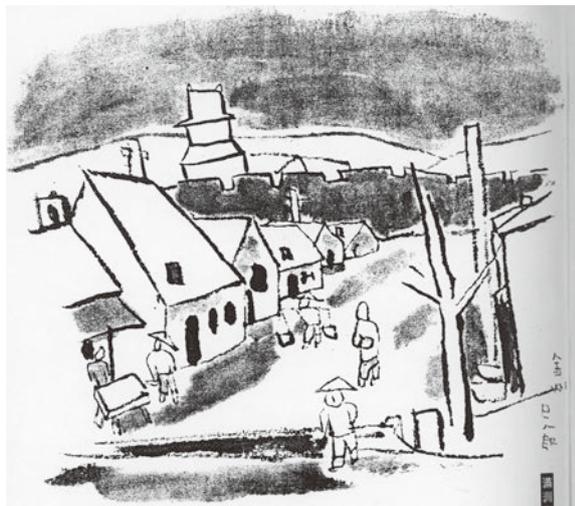
城内は城の雛形とでも言いたい。見るからに小さく纏まった平和境である。城門のなかでは、わたしは東の春和門が好きだ。あの辺は埃っぽくて、靴がポクポク土に埋り込むような道であるが土の色と城壁が同じ色に乾ききっていて、どうかすると重苦しい城壁が粉のように浮いて見える。夏の強烈な空には弱々しく今にも空に吸いこまれてゆくようや調子である。

城内からの鈴の音がして、暫らくすると土煙りが円い城門からふき出すように舞い上がると、赤色の総を、鼻面から尾ツボまでつけた馬がヌッと現われる。しかしこれは蒲鉾馬車であって、乗っているのは紅衣の姑娘であって欲しい。

次に北の永安門を出て、地獄極楽で有名な天斎廟とは反対に左寄の墓地のある附近から、三崎山への道中もよい。河原には洗濯がやっとなにあう程度の水溜りがある位で、円い石塊が採っても採っても採り尽せぬほどある。河原の両側は柳の茂林で右上にかすかに北の城壁が見え、その上に大和尚山の威容が、悉くが弱い景観のなかに別物のようにそそりたっている。

金州は美人の生れるところというがたしかに美人は多いようだ。吾々は日本の鐘紡の女工さんに、滅多に美人を見ないが金州の内外錦には喫驚するほどの美人を見る。そうしてどの女工さんも綺麗だ。金州女は昔から妾が多いというが、ほんとうのことは知らない。(巳八郎)

#### No. 209 「金州 巳八郎」



\*微に入り細を穿った最近の情報過多ぎみの「満州郷土画譜」にあって、久しぶりに抒情的かつ絵画的な内容になっている。巳八郎もたまにはこうした誌面で一息つきたくなったのかもしれない。

#### 第200号 (昭和12年9月1日発行)

#### No. 210 [満州郷土画譜87 碧山荘]

名前ほど立派なものではないが、独身苦力を年成一万人から、多いときは一万六、七千も収容していて、

創立以来三十年になろうとしている今日まで、事なく然も驚くべき労働力を発揮させている、その統制力と、苦力の従順には一考すべきものがある。現在の敷地総坪が三八、三七七坪、建物総坪が約一二、〇〇〇坪、他の敷地に、妻帯者苦力を五〇〇から六〇〇を住ませることのできる宿舎があり、苦力頭一六〇の宿舎もこれと隣接し、見るからに壮観を極めている。

昭和十年版の「碧山荘案内」を見ると、宿舎総数九二棟、このうち平家三八棟、二階建五四棟に、独身者が住んでいると書いてあるが、最近古い家から三階建に改築を終わったのもあり、現在改造しているものを合せて、全部で二十棟近くになるから、一階に八十人を収容すると、一階づつ二十階増えたとしても千五六百人の増員ができる訳である。棟の奥行は普通三間、間口は二階建で五間位を一房として三つに仕切っている。室の内は両端何れかに炊事場(厨房)があり、普通炊事場の隣りに帳面方(先生)が居り、間口に平行して三尺幅の通路を設け、階下なら両側に高さ二尺の床(炕床)を作り、此処に苦力が寝ようになっている。冬の暖房は炊事場の火気が炕床に流れ込むようになっている。二階は板張りの通路に床は通路と同じ高さの板に、階下と同じく安平を敷き、その上に万年床の布団が敷いてある。

苦力にはこの部屋が唯一の安眠の場所であり、うちとけて友と語り、遊戯にふけるところの安息所である。共同用の茶壺があり、机(?)があり、これ以上のものは彼等には不必要であろう。食事は仕事場か、夏ならば表に出て済ます場合が多いからである。巳八郎

\*掲載ページ数の関係で「満州郷土画譜87 碧山荘」の図や写真などは次回に回す。なお、昭和12年8月15日発行の『協和』第199号には甲斐巳八郎の記事や挿絵の掲載がない。考えられるのは、改題でふれた『苦力素描』の発行が9月だったので、その準備に迫られてのことだったのかもしれない。またそう考えると、第200号の記事が、かつて力を入れて取材し、掲載したことのある苦力の碧山荘になったことも理解されるだろう。素描集のための新たな取材が、この記事に反映されているのである。

# 美術館と中学校美術部の長期プロジェクトから考える 美術館の学び

崎田明香

本稿は2023（令和5）年9月から2024（令和6）年7月まで約1年間をかけて、福岡市立平尾中学校美術部と福岡市美術館が協力して行った「福岡市美術館プロジェクト」の記録である。同美術部に所属する生徒は中学2年生と3年生あわせて約45人であった。「福岡市美術館プロジェクト」は、平尾中学校美術部の顧問である綱崎璃函夢教諭（所属は2025年3月当時）と、教育普及を専門とする福岡市美術館の学芸員（筆者）が企画し実施した<sup>（註1）</sup>。

## 「福岡市美術館プロジェクト」のテーマ

同プロジェクトは、一般的に美術館にあまり来ない利用者層である「中学生」を対象に、美術館と中学生が長期的に関わり学ぶための実験的な教育プログラムの例として実施したものである。アートとは何か？という問いをテーマに、収集、調査研究、保存、展示、教育というミュージアムの基本的機能を意識しながら、地域のアートを調査し、マップを制作、作品を紹介するツアーの実施という一連の活動を行なった。また、活動を通じて、生徒、教諭、学芸員が異なる価値観を交換し、対話をしながら、互いに学びあうことも目的のひとつと考えた。

プロジェクトの具体的方法は、2006年から2007年にかけて平塚市美術館で行われた「市民参加による屋外彫刻調査」の例を参考にした<sup>（註2）</sup>。これは、屋外彫刻を学びの素材とし、市民が市内の屋外彫刻のデータベースを作成し、彫刻の保全活動を行うという、地域の文化資源を活用した教育プログラムの事例で、先に述べたミュージアムの機能に基づき実施されたものである。当時、平塚市美術館の学芸員であった端山聡子氏は、ミュージアムの学びには「享受する楽しみ」と「構築する楽しみ」という2つの種類があると指摘している。前者は展示を見て「おもしろいな」と思うような何かを受け止める感覚、後者は小さなことを意識的に積み上げ、蓄積を伴うこと、あるいは展示解説や原稿執筆などのアウトプットを前提とした学びを指す。そして両方を楽しみ、学ぶ利用者がいることがミュージアムの豊かさを一層高めるのではないかと述べている<sup>（註3）</sup>。「福岡市美術館プロジェクト」でも、この「享受する楽しみ」「構築する楽しみ」を踏まえ、1年間に及ぶ活動を行ない、方法は少し異なるが、福岡市内にある「アート」を見つけて調査をし、マップを制作し、保護者、教諭、生徒を対象にツアーをするというように、ミュージアムの機能を活かしながらプロジェクトを進めた。

また、同プロジェクト実施の背景には、福岡市美術館で中学生の来館が減少しているという問題意識があった。詳細は次章で述べるが、中学生は、週末に部活動があったり、塾へ通ったり生活が忙しい。また小学生と違い、週末などの余暇時間を、家族ではなく友人と過ごすことも増える年齢だ。美術館に来館する小・中学生を例に考えると小学校低学年頃までは保護者に連れられて来館する子も多いが、高学年になるとその頻度が減り、中学生になると保護者と出かける機会がさらに少なくなる。加えて、個人で、または友人を誘って美術館へ行く中学生が少ないことは想像に難くない。その点で、今回のように、部活動という小さな単位でも美術館を利用してもらう意義は大きいと考えた。

さらに、筆者自身が、美術館の教育普及担当者として「中学生」という捉えどころのない他者イメージを払拭し、彼らと直接に関わってみたいと考えたこともプロジェクトを実施した狙いの1つである。

## 中学生を対象にした教育普及活動の変遷

中学生が美術館を利用する場合、個人ではなく、学校行事や授業として来館することが多い。福岡市美術館でも、中学生を対象とした教育普及活動の1つとして、1997（平成9）年度からこどもたちと美術とのよりよい出会いの場を提供することを目的とした「アートアドベンチャー」事業を実施してきた。同事業は「市内の小・中学校を中心とした学校団体と連携し、児童・生徒たちが美術館を利用できる機会を増やすとともに、こどもたちに、より深く美術を味わってもらおうというもの<sup>（註4）</sup>」で、福岡市美術館の年報によると、当時はワークショップやギャラリートークを主に実施していた。なお、1984（昭和59）年にはすでに学校団体を対象にボランティアが列品解説を実施したという記録が残っており<sup>（註5）</sup>、その後、「解説型」から「対話型」へギャラリートークの方法を変更し、現在の「スクールツアー」事業へと発展、活動を継続している。

また、福岡市美術館では1999（平成11）年から福岡市中学校美術教育研究会（以下、中美研）の教員たちと連携し「中学生たちが夏休み期間中に一般来館者にギャラリートークをするなどの『交流ワークショップ』を当館で開催して、当館との関係を深めてきた」という実績がある<sup>（註6）</sup>。その成果として、2009（平成21）年に福岡市美術館開館30周年記念展の関連事業として開催された「美術館をひろげる・ふかめる」の中では、中美研を中心に、市内中学校と福岡市美術館が連携し、中学生が当館のキュレーターになってコレクション展を企画するという長期間のワークショップ「ジュニアキュレーター見参！」を実施しており、当時の中学校（中美研）と福岡市美術館のつながりの強さが読み取れる。

一方で、福岡市立の小・中学校に限ってみても、前述の「アートアドベンチャー」、「スクールツアー」事業で受け入れた小・中学校の学校団体の数については過去20年で大きな変動が見られた。図1が示すように、2006（平成18）年度から来館が増加し、2011（平成23）年頃にピークを迎え、その後減少している。2016（平成28）年以降の数値については理由が明らかで、2016年8月から約2年半にわたり福岡市美術館がリニューアル休館により同事業を休止したこと<sup>（註7）</sup>、2020（令和2）年から約2年間はコロナの蔓延である。ただし、小学校については、コロナが落ち着いた2021（令和3）年以降少しずつ増加しているのに対し、来館校の減少が続くのは福岡市立の中学校である。図2の来館人数の推移を見ると、中学生の来館人数は2010（平成22）年を境に大きく減少しているが、小・中学校は基本的に学年単位で来館するため、中学校では1校の来館人数が200から300人になることも少なくない。よって、来館校の減少による来館人数の減少幅が非常に大きくなる。なお、2019（令和元）年以降の市立中学校の来館は、年間を通して中学校美術部1校または2校のみが続いている<sup>（註8）</sup>。

実は、これまで述べた過去20年の福岡市立小中学校の来館数の増減には、福岡市で2007（平成19）年度から実施されていた「施設等を活用した体験学習事業」が大きく関係している。これは2007年以前から実施されていた市内小学3年生を対象とした「少年科学文化会館見学学習事業」（1983〔昭和58〕年度開始）と、市内中学2年生を対象とした「博物館学習事業」（1991〔平成3〕年度開始）が再編された事業である。福岡市教育改革プログラムの取り組みの1つであった「博物館を活用した教育の推進」と、2006（平成18）年4月に実施された「福岡市学力実態調査」の結果などを踏まえ、児童生徒が本物の芸術・文化に触れる体験学習の充実推進を背景に訪問施設の範囲が拡充され、「博物館・少年科学文化会館（当時）・美術館・アジア美術館・埋蔵文化財センター・保健環境研究所（まもる一む）等、もっぱら見学もしくは体験を目的とした施設」への訪問が奨励されることになった。美術館も奨励される訪問先となり、この2006年を境に、市立の小・中学校の来館が増加しているのは先に述べたとおりである。また、体験学習は必ず行うこととされ、施設までの交通手段は貸切バス、地下鉄、徒歩など状況に応じて学校が決定し、貸切バス等については福岡市教育委員会からの予算措置が行われた。なお、この取り組みは福岡市美術館がリニューアル休館中であつた、2017（平成29）年をもって福岡市立中学校の事業は終了している。

・福岡市立小学校・中学校・特別支援学校の来館数の推移（校数）

学校数	2000年			2005年			2010年			2015年			2020年										
	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
中学校	3	1	4	1	1	1	4	14	7	12	19	17	14	13	6	6	3	-	-	2	1	1	2
小学校	8	8	7	15	5	6	12	22	31	15	20	23	22	19	17	18	0	-	-	15	0	2	4
特別支援学校	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	1	1	1	0	0	-	-	0	1	1	0
全体	11	9	12	17	7	8	17	37	39	28	39	40	37	33	24	24	3	-	-	17	2	4	6

※H28年8月からH30年はリニューアル休館のためスクールツアーの実施なし

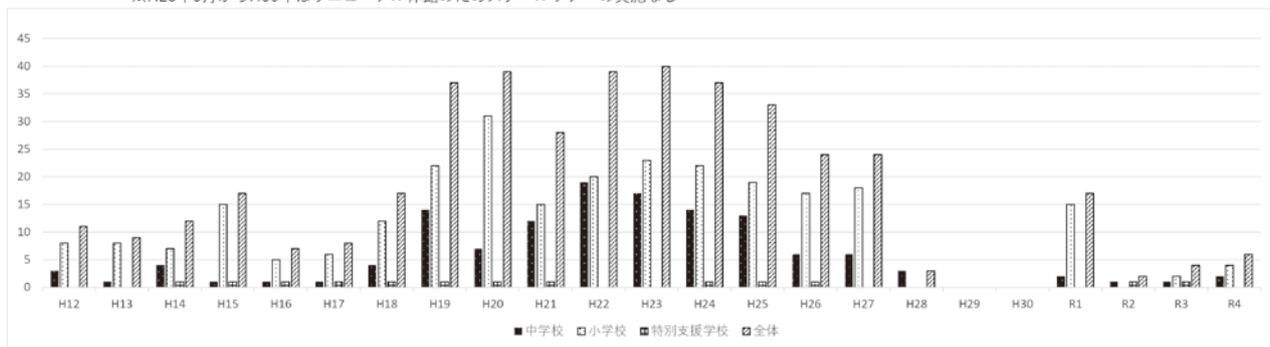


図1 福岡市美術館への福岡市立小学校・中学校・特別支援学校の来館数の推移（単位：校数）

・福岡市立小学校・中学校・特別支援学校の来館人数の推移（児童・生徒数）

人数	2000年			2005年			2010年			2015年			2020年										
	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
中学生	306	38	93	262	138	30	416	1536	669	2004	2511	2203	2109	1384	980	792	399	-	-	53	12	33	31
小学生	730	444	507	1316	644	657	1119	2577	2897	2674	2424	3196	2323	1824	1610	1424	0	-	-	1267	0	537	247
特別支援学校	0	0	7	8	9	14	13	22	5	0	0	0	7	11	8	0	0	-	-	0	7	24	0
全体	1036	482	607	1586	791	701	1548	4135	3571	4678	4935	5399	4439	3219	2598	2216	399	-	-	1320	19	594	278

※H28年8月からH30年はリニューアル休館のためスクールツアーの実施なし

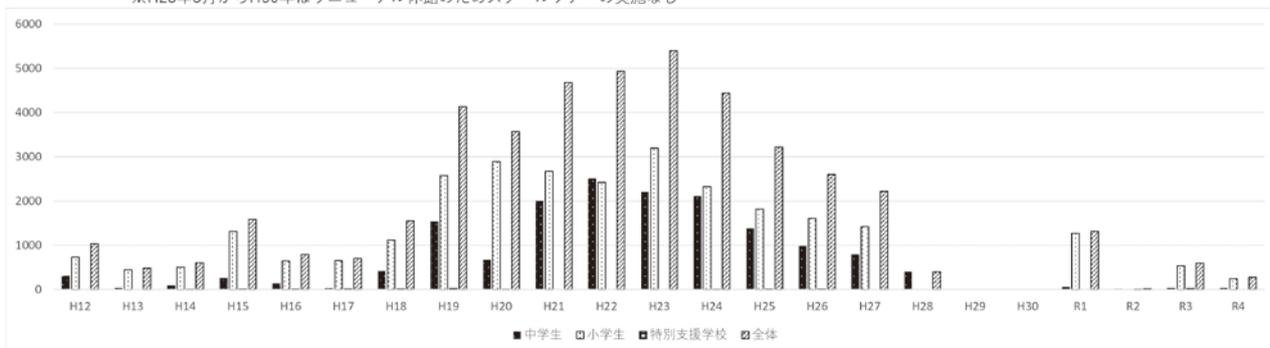


図2 福岡市美術館への福岡市立小学校・中学校・特別支援学校の来館人数の推移（単位：児童・生徒数）

市立中学校に的を絞って見ると、事業の終了、休館、コロナという複数の要素が重なり、2020年以降は美術部以外の来館はほとんどなく、美術部も年に1校程度という状況が続いている<sup>(註9)</sup>。また、これまで夏休みなどに、市立中学校の美術部の来館が複数あったが、それもコロナでゼロになったまま、以前の水準には戻ってはいない。本プロジェクトは、そのような状況の中で、筆者が福岡市立平尾中学校の綱崎教諭に、中学生と美術館が継続的に関わる活動ができないかを相談したことがきっかけとなり始まったものである。

## 福岡市美術館アートプロジェクトの内容

本章では、平尾中学校と福岡市美術館が行った「福岡市美術館プロジェクト」の約1年間の具体的内容を記録し考察する。なお、詳細は割愛するが、8回の活動ごとに綱崎教諭と筆者で打合せを行い、振り返りと今後の活動について意見交換をし、次回の活動内容を決定したことを添えておきたい。

### • 1回目の活動：アート探検1

日時	2023（令和5）年9月24日（日）
場所	福岡市美術館1階アートスタジオ、福岡市美術館周辺の4エリア（大濠・唐人町、六本松、赤坂、舞鶴）

### スケジュール

9時	プロジェクト説明、注意事項の確認
9時20分	アート探検へ出発（グループ活動）
11時20分	福岡市美術館に戻る
	昼休み
12時	グループごとに探検の報告、自分たちが選んだ「アート」を見て、基準を考えてみる
13時	終了

福岡市美術館のある福岡市中央区大濠公園周辺の4つのエリアを設定。生徒と教諭、学芸員で4つのグループに分かれ、各エリアを散策し、生徒たちが「アート」を見つけて調査し、記録した。

### 調査のルール

- 「アート」を最低3つは見つける（多ければ多いほどよい）
- 場所をメモする（配布したマップを参照すること）
- 写真を撮る（グループに1台学校で用意したタブレットを配布）
- 写真を撮る時には、全体を撮影し、いろいろな角度からも撮ること

生徒たちは、グループごとにたくさんの「アート」を街で見つけ、記録していた。報告会では、撮影した写真を投影しながら、記録した情報をもとにそのアートの説明をし、全体で情報共有をした。最低3つというルールを決めていたが、結果的にどのグループも10～20程度のアートを発見し記録していた。

### • 2回目の活動：アート探検2

日時	2023（令和5）年11月18日（土）
場所	福岡市美術館1階アートスタジオ、福岡市内の3エリア（博多、中洲、天神）

1回目と同内容の活動を、アートを探す範囲を博多や天神という福岡市内の繁華街へと拡大して行った。活動は中学校教諭と生徒で実施し、どのグループも前回を超える数のアートを見つけ記録した。訪れることの多い繁華街であるが、このプロジェクトで初めて気がついたアートが多く見つかったことが報告された。また、見つけたものがアートであるか、生徒たちは記録をしながら議論も行なっており、1回目から内容が発展していったことが分かる。

・ 3 回目の活動：アート探検の報告

日時	2023（令和5）年11月25日（土）
場所	福岡市美術館 1 階アートスタジオ

スケジュール

9時30分	福岡市美術館集合
9時40分	グループごとに 2 回のアート探検の報告
10時40分	グループでどの作品を「アート」とし、マップに落とし込むか選ぶ。それがなぜ「アート」なのかを考える
12時	終了

2 回の「アート探検」で記録したアートについて、撮影した画像を見ながら、確認をする作業から活動を始めた。撮影画像を全て小さなサイズで印刷したものを見て、自分がアートだと考える作品を、そこから切り取り、分類する作業をした。当然、生徒によって「アート」だと選ぶ作品は異なる。しかし、そこに各自の選択基準があるはずだと考えた。活動の後半は、選んだ作品の「基準」をホワイトボードに書き出して、視覚的に共有していった。彼らがアートの基準としたものには、大きさ、色彩の派手さ、珍しい形、など客観的な造形の特徴がほとんどだった。一方、銅像（主にブロンズ像）、普段からよく目にするものはアートとは考えないという意見が多かった。ブロンズ像は、地域に貢献した者や歴史上の人物が多く、中学生にとっては歴史（社会科）との直接的な結びつきを想起させるらしい。一方、彼らの「基準」は揺れや矛盾を孕んでいることも明らかであったが、その点は次回以降も引き続き考えることにした。

・ 4 回目の活動：平尾中学校美術部の「アートの基準」を考える

日時	2024（令和6）年2月18日（日）
場所	福岡市美術館 1 階アートスタジオ

スケジュール

9時30分	平尾中学校美術部の「アートの基準」を考える活動
11時	ギャラリー、特別展を鑑賞
12時	終了

3 回目で考えた自分たちのアートの「基準」を再確認した。前回、多くの生徒がアートだと選んだもの、選ばなかったものを分類し、その作品画像を机に並べて全員で観察した。「アートである」「アートではない」と分類した作品の共通点を探し、付箋に書き出して全員で共有。この作業では「アートである」基準を整理するために、あえて「アートではない」と排除したものに注目した。選ばなかった理由を考えることで、逆説的にアートである理由が浮かび上がると考えたからである。



自分が紹介したい作品を 1 点選び付箋に書いたもの



作品画像を観察しながら作業をする生徒たち

次に「平尾中美術部の福岡市のアートMAP」を作る上で、自分が必ず紹介したい作品を1点選んで、なぜそれがアートかを付箋に書く作業を行った。3回目と同様、客観的な作品の形態や色彩を理由にする生徒が多い一方で、主観的な視点でも理由を考えるように、筆者と綱崎教諭から生徒たちへ提案をした。同じテーマで方法を変えて思考を巡らせることで、生徒たちの中で、少しずつ自分の考えが鮮明になっていく様子があった。

・5回目の活動：自分のアートの基準（定義）を考えて作品をえらぶ

日時	2024（令和6）年5月18日（土）
場所	福岡市美術館1階アートスタジオ

スケジュール

9時30分	コレクション展の鑑賞
10時15分	自分の考える「アート」の基準で作品を選び、選んだ理由を使って作品紹介文を書く
11時30分	終了

4回目から3か月が経過していたため、まず福岡市美術館のコレクション展を鑑賞し、美術館でのこれまでの活動を思い出すための時間をとった。筆者が対話型鑑賞の方法を用いながら「どうしてこの作品は美術館で展示されるのか？」「アートとは何か？」「みんなが街で見つけたアートとは何が違うのか？」などの問いかけをし、意見を交わしながら鑑賞を進めていった。

後半は、4回目に各自が選んだ1点について、どうしてそれがアートかを中心に、作品の紹介文を書く取り組みをした。前回に続いて、客観的な作品の説明だけではなく、主観的な選択の理由も文章に必ず入れるようにした。自分の頭にもやもやと浮かぶ感覚的なイメージを言語化するという作業は容易ではなく、生徒たちは大変苦勞していた。しかし、筆者や平尾中学校の教諭たちが助言をしながら、また友人同士で相談をしながら、全員が選んだ作品の説明文を書きあげた。その後、紹介文の上に作品の絵を描いた。絵で表現することに長けている美術部の生徒たちは、文章よりもはるかに素早く絵を仕上げている。その後、綱崎教諭の指導のもと、部活動で絵と紹介文を仕上げ、全員の作品をまとめた28ページの冊子とアートMAPを制作した。

・6回目の活動：完成したアートMAPの共有、アートとは何か？をもう一度考える

日時	2024（令和6）年6月11日（火）
場所	福岡市立平尾中学校

スケジュール

16時30分	これまでの活動をまとめたMAPを見ながら、活動を振りかえる
17時30分	終了

5回目の終了後、綱崎教諭から冊子（図3）とアートMAPが完成したことの報告を受けた。これまで、基本的に全ての活動を福岡市美術館で行ってきたが、今回は平尾中学校を筆者が訪問した。それは生徒たちの中学校での様子を見たいという筆者の希望でもあった。

生徒たちと完成した「平尾中美術部の福岡市のアートMAP（図4）」を見ながらこれまでの活動を振り返った。「アートとは何か？」という問いに「価値観の違いで感じ方が違う」「いろんな見方をいだかせる」「時間をこえる」「ひとつにまとめられない」「内面で感じる」という回答があり、活動を通して生徒たちの価値観が柔軟に広がった印象を受けた。当初、アートの基準は色・形・大きさといった客観的な事実だけを根拠にする生徒がほとんどであったが、今回はアートについて客観・主観の両方の視点から理由を述べていた。繰り返した言語化のプロセスの中で自分自身と正面から向き合った生徒たちの変化が、回答から見て取れたように思う。



アを絞り3点を紹介する内容である。ツアーに向けて、紹介文を執筆しZoomでのリハーサルを行った。

• 8回目：平尾中アートツアー

日時	令和6（2024）年7月7日（日）
場所	福岡市中央区内（天神エリア）

スケジュール

8時30分	天神エリアにある平尾中美術部が「アート」だと考えたものをツアー形式で3つ紹介
10時	終了

早朝から集合し、天神エリアの3つのアートを紹介するツアーを実施。この「アート」とは、平尾中学校美術部が考えたアートの基準で選ばれたものである。街を歩きながら、その作品（もの）を選んだ生徒が制作した冊子の紹介文をもとに作品の前で紹介をした。ツアーには、美術部1～3年生、保護者、学校関係者、美術館関係者が参加した。ツアー終了後、これまでのプロジェクトの振り返りを行い1年間の活動を終了した。



天神エリアでのアートツアーの様子

生徒たちのアンケートから

プロジェクト終了後、参加した生徒にアンケート調査を行い、2年生と3年生のうち21人から回答を得た。プロジェクトの前後で美術館に対する印象がどう変化したかについては、以下のような回答である（図5）。図5から分かるように、生徒たちの美術館に対する印象が大きく変化していることが分かる。プロジェクト終了後の方が、美術館に対しての心理的距離、物質的距離のどちらも近くなっていると言えるだろう。

また、図6は生徒たちの考え方や価値観の変化についての回答である。図6に示すように、回答者のうち16人（約80%）が、本プロジェクトを通して考え方や価値観が変化したと回答している。具体的な理由としては「いろいろな見方の角度を変えることで、見えなかったことが見えるようになった」「まちなかで見かけるものをア

このプロジェクトが始まる前、あなたは美術館にどのような印象を持っていましたか？（回答より抜粋）	プロジェクトが終わった今、あなたにとって美術館の印象は変わりましたか？（回答より抜粋）
・芸術が好きでお金持ちが行くところ	・少し身近にある印象が変わった
・子供が行くことが少ない場所で大人のほうが来る場所	・もののみかたを深められる場所
・真面目なところ、静かな空間。ちょっとこわい	・結構親しみやすいところだと思って
・すごい神聖なところ	・歩いて行けるとこ
・遠いとこ	・絵だけでなく立体的なものや考えさせられるようなものもある
・気軽に行けないような場所	・楽しい場所、友達とでも行きやすい
・行くのに少し緊張する	・よく見るとたくさんの物語があるところ
・物語や意味のない絵があるところ	・変わりました。また何か企画があれば行きたい
	・中学生でも、誰もが楽しめて、自分とは違う視点や考え方を知れる場所が変わった

図5 プロジェクト前後の生徒たちの美術館に対する印象の変化（回答より抜粋）

トかな?と考えるようになった」「自分がアートだと思った根拠やもとなる考えをしっかりと言葉に表せるようになったから」という回答があった。わからないを選んだ生徒は4人(約20%)であり「まだ自分のアートの基準が明確になっていないから」、自分の価値観が変化したか分からないという理由が多かった。

これからも美術館へ行くか?という問いについては、8割の生徒が「はい」を選んでいる(図7)。さまざまな理由があったが「面白いから」という回答がとて多かった。また「世界観が広がり、自分の考え方が変わるから」というものや「面白かったから今度は家族や友人と行きたい、また別の作品も見たい」という回答も複数あり、生徒たちが美術館に関心を持ち始めていることが分かるものであった。

プロジェクトで自分たちの「アート」の基準を考えましたが、プロジェクトによって、あなたの考え方や価値観は変わりましたか?(単位:人)

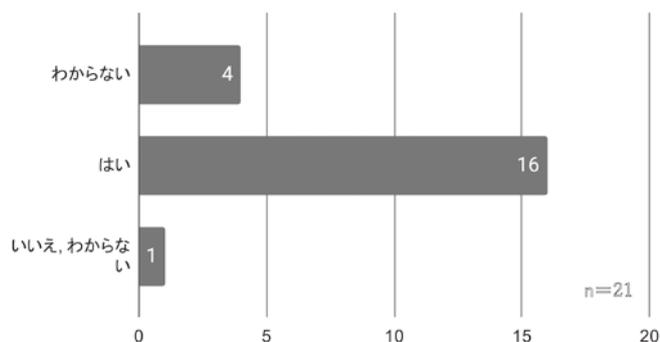


図6 生徒たちの考え方、価値観の変化についての回答

あなたは、これからも美術館に行くと思いますか?(単位:人)

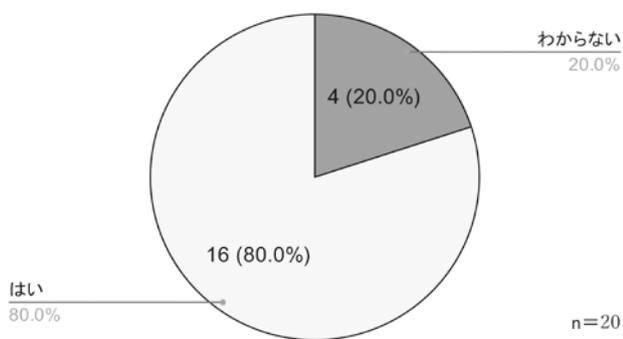


図7 今後も美術館に行くかどうかについての回答

### プロジェクトを振り返って

本プロジェクトを終え、あらためて美術館の教育活動の意味を考えた。プロジェクトを振り返ると、さまざまな場面でさまざまな人や物事が変容していく場面に立ち会ったように感じる。アートとは何か?という価値観の変容、回数を追うごとに変容していく中学生の態度と真剣さ、大人が持つ「中学生」のイメージの変容、そして1年間をかけて構築した生徒、教諭、学芸員の関係性の変容。本プロジェクトの成果は、活動を巡って、そこにいる参加者に起こった「変容」そのものであり、つまりそれが美術を通して学ぶ、学び合うということではないか、と筆者は考えている。

約1年をかけたプロジェクトは当然、準備を含めて時間と手間がかかる。よって形式さえ真似れば簡単にできる類のものではなく、企画者の熱意も必要になるだろう。持続可能性の観点から言えば、落第かもしれない。ただし、今回でいう「中学生」のように、美術館に来ない人(未来の/これからの利用者)へ向けた具体的な活動を行うために、今は美術館に来ない(来られない)人の具体的な顔を想像できるようにすることは、教育普及担当者はもちろん、美術館の職員にとって重要だと考えている。なぜなら美術館の職員が利用者を想像できなければ、美術館の活動が自己満足的で閉ざされたものになってしまうからだ。実のところ、本プロジェクトを終えてから、筆者は「中学生」と聞くと平尾中学校美術部の生徒たちが頭に浮かぶようになった。それはとても具体的なイメージである。具体的なイメージは、具体的な活動へと結びつきやすい。

一方、課題も多い。例えば、生徒へのアンケート調査で、5年後、10年後に、生徒たちにとって美術館という存在がどう変化しているかまでたどることができれば、本プロジェクトの生徒たちへの長期的な影響を追跡調

査することができて、興味深い結果が得られるかもしれない。また、同様のプロジェクトを継続して実施するためには、学芸員と教諭の信頼関係や、時間の調整も必要だ。最後に、中学生の美術館利用が減少しているという課題も解決していない。学校単位での来館を増加させるのは容易ではないが、今回のように部活動という小さな単位であれば、引き続き実験的な活動もできるかもしれない。本プロジェクトが今後への試金石として、活かされることに期待したい。

最後に、本プロジェクトの共同企画者である綱崎教諭に、中学校の立場からプロジェクトについての所感を寄せていただいたので、下記に掲載する。

### 中学校と美術館がつながる 福岡市立平尾中学校美術科 綱崎璃図夢

「福岡市美術館プロジェクト」は2023年の夏に始まり、約1年間多岐にわたって崎田学芸員と一緒に取り組んだプロジェクトになりました。私も崎田学芸員も、初めての取り組みであったので、試行錯誤しながらプロジェクトを進めていきました。たくさんの打ち合わせを重ね、回数を重ねていくごとに方向性も見え、アートツアーまで実現することができました。何より、生徒たちにとっては、学校から離れて、郊外で活動する非日常的な「特別感」がとても楽しそうでした。

プロジェクトを終えて、生徒たちにとってアンケートにはこんなものがありました。「自分がアートだと思った根拠や元になる考えをしっかりと言葉に表せるようになった」「美術館の中にあるアートだけでなく、自分たちの生活の中にたくさんのアートがあることを知って、また、それぞれのアートにいろいろな思いが込められていることがわかって、今までよりも、アートが少し身近なイメージに変わりました」「プロジェクトの前は、アートとは何かという問いにうまく答えられなかったけれど、プロジェクトを通してたくさんのアートに触れるうちに、アートとは一人では決められない、正解のないものだどだんだん分かっていって、とても楽しかったです」「身近にあるものにも『これってアートかも！』という気づき生まれ、毎日が少しだけ楽しくなった気がします！」「いろいろなところを、アートを探しながら歩くことで自分たちの住み慣れた街が一変して全く違う街に感じました。これから、まちなかのパブリックアートにも注目していこうと思います」。きっと平尾中学校の美術部の生徒たちは、何気ないところにアートを感じてくれて、豊かな日常を送ってくれるだろうと願っています。

また、同時期に美術部では「見つける・見つめる」というテーマで、美術部合同作品展の共同制作を行ないました。自分たちで歩き、見つけて、じっくり鑑賞した「福岡市美術館プロジェクト」の活動がまさにテーマと合致しており、歩んだ道のりや、先々で出会った作品らを組み合わせた絵を制作しました。(図8)

かつて中学校では、行事の一環として芸術鑑賞があり、美術館や劇場、演奏会に連れて行ったり、学校に来て頂いたりして、高い文化芸術に触れる機会に恵まれていました。しかし今では、芸術鑑賞に関する予算は少なくなり、機会もほとんどなくなりました。生徒たちがどんどん芸術から離れ、関心がなくなっていく一方であるように感じます。最近では、美術館に



図8 平尾中学校美術部が共同制作した作品

1 回も行ったことがないという生徒が大半かもしれません。

これから、AIなど人工知能がさらに発達し、考えなくても正解を導き、瞬時に欲しい情報をAIが補ってくれる未来になることは間違いないと思います。だからこそ、今必要な力は「自分なりの答え」をもつことだと思います。その力を磨くためには、「感じる」「見る」「作る」という活動を通して、自分の感じたこと・考えたことに価値を見出し、大切にすることが大事です。それができる人になって欲しいと思っています。そして、それを叶えてくれるのが、多様な価値観を知ることができて、かつ自分なりの答えを見つけることができる場所である、美術館だと思います。学校と美術館がつながり、手を取り合って未来の子供たちの育成に努めていきたいです。

〈註〉

1. 本プロジェクトには福岡市立平尾中学校美術科講師である橋口美祐氏(2023年度)、志方陽菜氏(2023年度)、岩本佳央理氏(2024年度)にも参加、協力をいただいた(いずれも所属・職名は当時のもの)。
2. 端山聡子「市民参加による屋外彫刻調査と寺畑助之丞作品の保全活動をめぐって」、『柳生不二雄と彫刻 屋外彫刻調査保存研究会会報 第4号』、屋外彫刻調査保存研究会、2008年、pp.77-82。
3. 前掲書(註2) pp.81-82。
4. 「平成11年度 福岡市美術館 活動の記録」、福岡市美術館、2001年、p.28。
5. 「福岡市美術館年報 no.3 昭和59/60年度」、福岡市美術館、1987年、p.66。
6. 「美術館をひろげるふかめる報告書」、コレクション／コネクション展実行委員会(福岡市美術館内)、2010年、p.5。
7. 2016(平成28)年8月からのリニューアル休館中はスクールツアーに代えてアウトリーチ「どこでも美術館」事業を開始し、市内小・中学校を訪問する教育普及活動を実施した。2019(令和元)年のリニューアル開館後は、訪問先を離島の小中学校、院内学級、特別支援学校など美術館に来にくい子どもたち、および公民館での高齢者向けのアウトリーチ活動として展開している。
8. 2022(令和4)年に来館した市立中学校2校のうち1校は福岡市立きぼう中学校である。同校は2022年4月に開校し諸事情により十分に義務教育を受けることが出来なかった人々を対象とした福岡県初の夜間中学校である。
9. 図1、2に掲載したデータは福岡市立の小・中学校に限った数値であり、福岡市美術館ではこの外にも市内外の私立中学校や他県からの修学旅行など、福岡市立以外の中学校団体も毎年数件、受け入れている。

# 吉田博《(題不詳)》保存修復処置報告

## —美術館内環境を利用した変形修正の可能性—

渡抜由季

### 1. はじめに

本稿は福岡市美術館所蔵の油彩画、吉田博《(題不詳)》(1-A-767)(口絵1、図1、2)の修復を報告するものである。本作は2024(令和6)年度に個人より寄贈を受けたもので、当館に収蔵された段階で、木枠に張り込まれた画布が緩み、変形していた。そして作品の広範囲にわたり絵具が浮き上がり、剥落していた。絵具の固着状況は思わしくなかったものの、九州の郷土作家である吉田博が得意とした山岳風景であり、当館で収蔵しても十分に活用できる可能性が見込まれることから、収蔵を決定した。ただし、展示活用するためには、それに耐える強度が確保されていることが前提となる。本格的な修復は、作品の補強のためにも必要な手段ともいえるが、手間をかければ、それに比例するように予算も時間もかかる。当館は規模の大小に関わらず処置を必要とするような所蔵作品を数多く抱えており、一つの作品に数か月といった修復を内部職員のみで行うことは、現実的とは言えないのが正直なところである。そのため、本処置では全体的な本格修復というよりも、必要な要素をピンポイントで処置することで、中長期的な保存に耐える状態を目指した。今回はその事例報告である。

### 2. 作者と作品について

作者である吉田博(1876-1950年)は福岡県久留米市出身の画家である。中学修猷館在学中に教師吉田嘉三郎に画才を認められ養子となって以降、画塾・不同舎で小山正太郎の指導のもと水彩や油彩画等、本格的な画業を学んだ。1899年から1906年にかけて吉田は中川八郎とアメリカ、フランス、イギリス、ドイツ、イタリアに滞在しており、吉田が持ち込んだ自身の作品を数度にわたって展示した。帰国後は「太平洋画会」を創立し、第1回展に出品した。1920年代以降は木版画制作にも打ち込み、生涯で250点ほどの版画を残している。描写力に対する徹底したこだわりをもつ吉田は、山岳風景に強い関心をもっていた。「私は画家だから、従って画の対象として山を観る。山岳の美に魂を打たれつつ、その美を画布の上に再現するといふことは、私にとっては無上の喜びなのである。つまり私は画を書くために山へ登るのだといってもよかろう。」(註1)と述べており、1949年に日本山岳画協会を創立するほどの入れ込みようであった(註2)。

本作は、前景に蛇行する川や兩岸の岩場、遠景に山脈とふもとの集落が粗いタッチで描かれている。描かれた場所は特定できていない。制作年についても不明であるが、P12号(60.6×45.5cm)という本作のサイズと類似し、かつ山岳風景を題材とした作品が、大正中期の作品と推定されている(註3)。また、大正から昭和初期は、吉田が日本アルプスをはじめとした国内の山々を訪ね、中小型の作品を繰り返し制作していた時期でもあった(註4)。図像やサイズの類似性の二点を根拠として、本作も大正～昭和初期に描かれたものであると推測できるという所見がある(註5)。

次に作品の状態について述べる。油彩は画布に描かれ、サイズは縦61.0×横45.0(cm)と、額装されている。画面全体(入子跡を除く)に、煤状の汚れが付いていた。ワニスは塗布されておらず光沢はない。絵具の厚みは薄めであるものの、山肌部分は盛り上げられ、溪流の筆致もはっきりとしている。全体的に浮き上がり剥落が

多く認められるが、特に中央よりやや右上に約17×7 cmの範囲内で剥落が集中していた。この範囲は裏面透過光画像で確認したところ、ピンホールが数多く確認された（図3）。剥落は地塗りに落ち、剥落の中から布目が見えることから、地塗りの前に布に塗布した膠層に何らかの不具合が起こったと考えられる。また、浮き上がりは剥落箇所隣接しており、現状では今後も剥落は進行し続けることが予想された。画布は木枠へ張り込まれた力に影響されるように変形しており、下部の左右端にかけて特に膨らんでいる（図4）。また、張り込みも全体的に緩んでおり、平置きすると裏面の中棧に布があたる程である。側面の張りしろは短めに裁断されており、留め具の釘は赤茶色に錆びている。木枠裏面にはサイズを示す「P12」と、画材店「文房堂」のメーカー印「I BUMPODO」と焼き印が押されている（註6）。額縁裏面の上下2箇所には「繪画額縁装美販賣 磯谷商店 長尾建吉 東京芝新櫻田町十九」と記されたパレット形のメーカー印が記されている（註7）。額縁は汚れ、さらに左下部および左中央が欠損によって白く見える。額縁と作品はT字金具2点によって固定されている。

### 3. 処置方針の検討

今回、処置方針を決める上で重要なポイントは、浮き上がりや剥落が画布の変形に起因すると考えられることである。画面右上に認められた広範囲の剥落は、部分的であるため技法材料の問題が影響していると思われるが、その他の浮き上がり・剥落は全体に点在しており、また画布の変形は木枠張り込み時の力に影響され形成されていたため、長年の温湿度変動による布の弛みと変形が一番の要因であると思われた。油彩画の変形修正は、一般的に木枠に楔を打つ、もしくはストレッチャーを用い画布を引っ張ることで修正し（註8）、場合によってホットテーブルを用いて吸引や加温加圧する（註9）。熱を加えて変形修正を行うことは、変形要因が絵具に起因する場合は有効だろう。ただし、本作の変形は、絵具剥落の度合いから、絵具というよりも布に起因しているように思われた。また、加温による絵具への負荷も多少影響するだろう。そのため、本処置では加温加圧はせずに、美術館での適切な保存環境下で収蔵することで、徐々に形状が修正されていくことを期待した。なお、木枠への張り込みに必要な張りしろは既に短くされていたため、ストリップライニングにより麻布の耳を四辺に貼り足すこととした。張り込みの緩みを戻し、さらに浮き上がりや剥落箇所を画布にしっかりと接着することで、美術館内の保存環境（通年：温度22℃、湿度55% RH）であれば現状を長期間維持できると見込んだ。そして介入は出来る限り最小限とするため、補彩は行わず、現状の見た目を維持することとした。

### 4. 処置工程と内容

1. 処置前撮影および調査	修復前調査および記録として正常光、測光、透過光の三種を撮影。また事前に耐溶剤テストを行い、精製水、エタノール、ミネラルスピリットの安全性を確認、採用した。
2. 額縁・裏面洗浄	額縁から作品を取り外し、さらに画布を木枠から取り外した（図5）。額縁は湿らせ固く絞ったウエスで汚れを拭き取った。画布はミュージアムクリーナーで画布の目に詰まったもしくは堆積した埃を取り除いた。
3. ストリップライニング	作品を木枠に張り込み直すため、麻布で作った耳を作品四辺に接着した（図6）。接着剤は熱可塑性EVA樹脂を使用。
4. 表打ち・浮き上がり接着	表面の保護と浮き上がり接着を兼ねて、表打ちを行った。使用材料は典具帖和紙と魚膠水溶液10wt%である。（図7）

5. 画布張り込み	作品四辺を補強した布を均一の力で引きながら木枠に張り込んだ。支持体に変形していたため、張り込む際に位置を調整した。
6. 画面洗浄	精製水を湿らせた綿棒を用い、表打ちを取り除いた（図8）。その際、表面に残存している余分な接着剤と汚れも取り除いた。
7. 補彩	全体を確認し、目立っていた画面中央部の剥落箇所および変色箇所の2点に溶剤型アクリル樹脂絵具を用いて補彩した。また、額縁の剥落などが目立つ箇所も補彩した。
8. 処置後撮影	修復後の記録として正常光、測光の二種を撮影。

## 5. 処置後の結果と今後の課題

修復を終えた作品は、外観上は劇的に変化することはなかった（図9）が、浮き上がり接着とピンホールを埋めるために用いた膠が、作品のピンホールを通じて、裏面ににじみ出た（図10）。もう少し濃い濃度の膠を用いることで裏面ににじみを予防することが可能であっただろうが、接着力が強力となりすぎるという点を考慮して今回の濃度に落ち着いた。肝心の変形修正については、張り込みの緩みを戻し、布を張り込み直し、浮き上がり接着を行ったことで、中央部分は完全とは言えないものの、画布の歪みと変形を抑えることができた（図11）。今後は美術館内の保存環境で適切に保管し時間をかけることで、形状が全体的になじみ徐々に修正されていくことを期待したい。変形修正の効果は、記録し修復直後の画像と比較することで評価できるだろう。そのため長期的な視点で引き続き経過観察を行い、適宜記録を取っていききたい。また、現時点では今回のような変形修正の手法が美術館の環境下でどのように作品に影響するか、正確な時間や効果を客観的に評価する調査・実験は行っていない。これについても文献調査や比較調査など、引き続き検証していきたい。

（わたぬきゆき 福岡市美術館学芸員）

〈註〉

- (1) 吉田博『高山の美を語る』、山と溪谷社、2021年、p.8
- (2) 安永幸一『山と水の画家 吉田博』、弦書房、2009年
- (3) 《街道の春》、《富岳》（『生誕140年 吉田博展』図録 [2016-2017、毎日新聞社] p.109掲載）
- (4) 安永幸一「吉田博の生涯」『福岡市美術館叢書 吉田博資料集』福岡市文化芸術振興財団、2007年、p.92
- (5) 福岡市美術館忠あゆみ学芸員の教示による。
- (6) 「文房堂の歴史」<http://www.bumpodo.co.jp/company/history.html>（最終閲覧日 2025年1月22日）
- (7) 磯谷商店は明治38年に工場及び店を芝区に移したことから、額がオリジナルであるとするならば明治38年以降に制作されたものであると予測できる。（「長尾建吉 日本美術年鑑所載物故者記事」、東京文化財研究所、<https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/8529.html>（最終閲覧日 2025年1月20日））
- (8) Joyce Hill Stoner, Rebecca Rushfield, Conservation of Easel Paintings, Routledge, 2012, pp.148-160
- (9) Gustav A. Berger with William H. Russell, Consolidation of flaking paint films, Conservation of Paintings Research and Innovations, 2000, pp.158-159



図1 修復前 画面・全体図・正常光（額入）

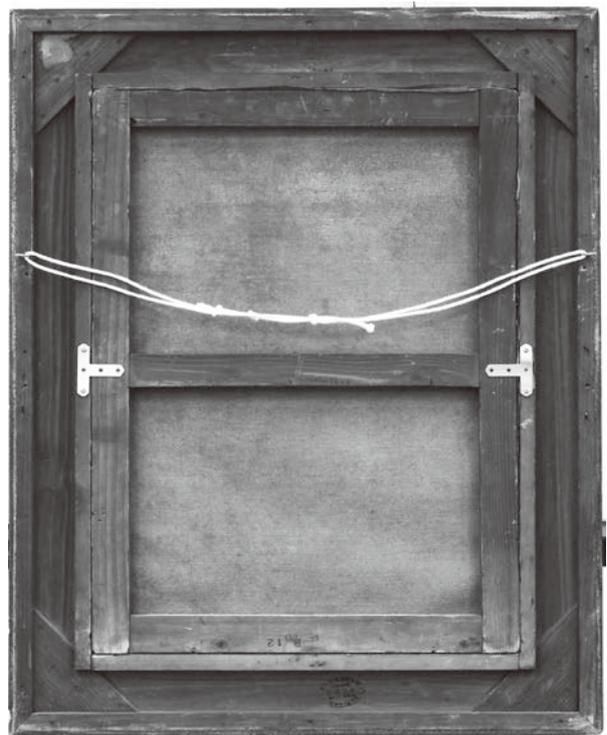


図2 修復前 裏面・全体図・正常光（額入）



図3 修復前 画面・全体図・透過光  
（白点がピンホール）



図4 修復前 画面・全体図・測光

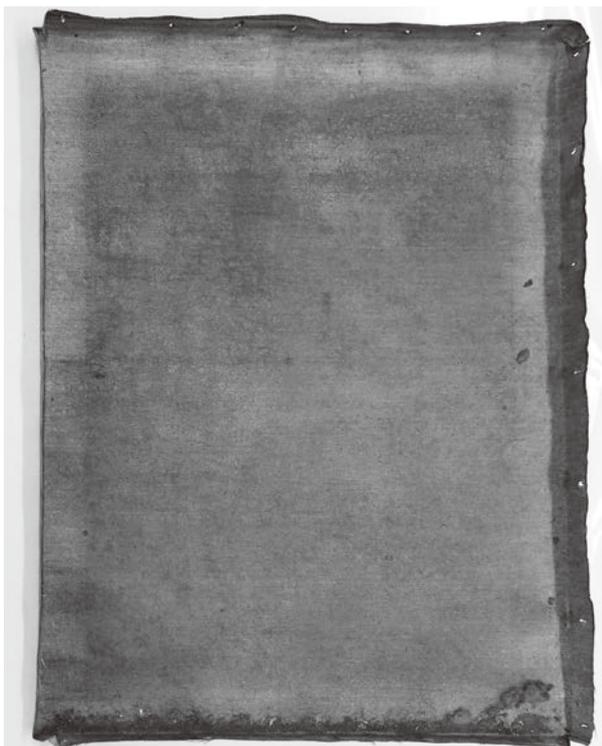


図5 修復中 木枠から取り外した画布（裏面）



図6 修復中 張しろの接着



図7 修復中 表打ち、浮き上がり接着後の様子



図8 修復中 画面洗浄

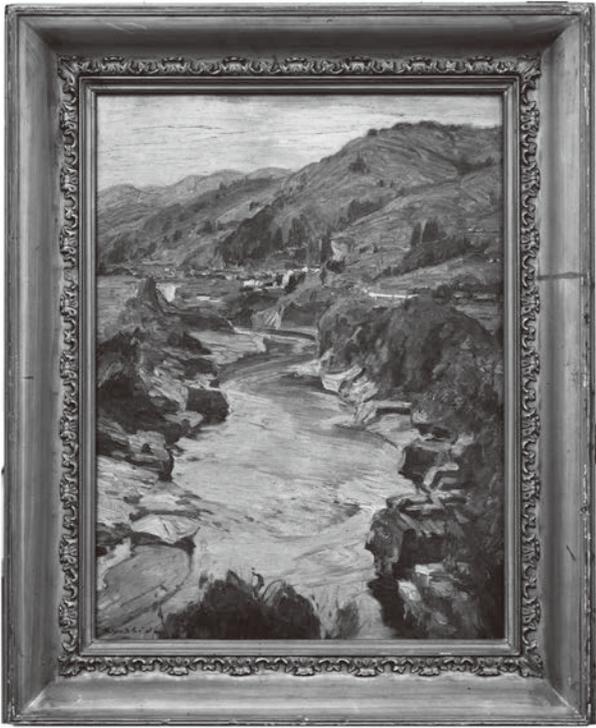


図9 修復後 画面・全体図・正常光（額入）



図10 修復後 裏面・全体図・正常光（額入）



図11 修復後 画面・全体図・測光



〈註〉

- (1) 稲木春千里(一八九二—一九七九)、本名は千代作。後に「東千里」と号す。木工芸家。
- (2) この茶事の内容は『日本の茶道』通巻一九九号(日本の茶道社、昭和十九年七月発行)二一—二三頁所載、耳庵叟(松永耳庵の筆名)「松滴庵供養の茶」にも記録されている。この中では本茶事の月日を六月五日としており、仰木の記録(六月六日)と異なっている。どちらの日が正しいかは判然としない。
- (3) 東京都渋谷区千駄ヶ谷にある日蓮宗の寺院「仙寿院」のことと思われる。
- (4) 現在、福岡市美術館所蔵「古林清茂墨蹟(幽禅人送別偈)」(重要文化財)。
- (5) 服部玄三のことと思われる。服部玄三(一八八八—一九五九)は実業家。服部時計店(現在のセイコーグループ株式会社)の二代目社長。三代目社長を務めた服部正次(山楓)(一九〇〇—一九七四)の兄。
- (6) 本稿四二頁(本書影印本上巻・四九〇—四九二頁)「○服部山楓氏持ち込夜襲の茶七月九日 夜」参照。
- (7) 古賀峯一(一八八五—一九四四)。海軍軍人。第二十八代連合艦隊司令長官。昭和十九年(一九四四)三月三十一日、パラオからダバオへと移動中の搭乗機が遭難、後に殉職扱いとなった(海軍乙事件)。
- (8) 山本五十六(一八八四—一九四三)。海軍軍人。第二十六・二十七代連合艦隊司令長官。最終階級は元帥海軍大将。昭和十八年(一九四三)四月十八日、ラバウルからブイーンへ移動中の搭乗機がアメリカ軍機に撃墜され、殉職(海軍甲事件)。
- (9) 本書影印本上巻・二三九—二四二頁「畠山翁不忍池畔の朝茶 七月廿一日 朝」(翻刻は「雲中庵茶会記翻刻稿」④『福岡市美術館研究紀要』第八号、八一—八二頁)参照。池の蓮が期待通りに咲いてくれなかったことで、席主の畠山はその朝に、客人から見える水際に二、三本の蓮花を植えて対応した。このことに対し「腑に落ちぬ気もされた」と政斎は記している。
- (10) 正しくは松永耳庵『茶道春秋』(昭和十九年刊)。同書下巻・八〇—九頁所載「畠山翁不忍池畔の朝茶 七月廿一日」中に「蓮は時季が早いので一向咲いてくれぬ。客も探して見たが見当たらぬ。主人の嘆息知るべしである。」と書いているが、特に批判めいた記述はない。
- (11) 安田鞞彦(一八八四—一九七八)。日本画家。
- (12) 加藤正治「犀水」(二八七—二九五二)の三男・正隆(一九一六—没年不詳)を誤記したものであろうか。
- (13) 「米量」とは古唐津の一種で、一説に米を量るために用いられたことに由来する呼称としよう。

- (14) 佐藤豊(一九二二—一九九九)、号は豊樵。木工芸家。
- (15) 本書影印本の「人物略解説」七四六頁に「松本老夫人 松永耳庵茶友」とある。
- (16) 本書影印本の「人物略解説」七四二頁に「田中たか 田中徳次郎(東邦電力重役) 未七人 龍溪高橋彦次郎の娘 高橋正彦の姉 疎開仲間(柳瀬山荘)」とある。
- (17) 『古今和歌集』巻第七「賀歌」所載「藤原三善が六十賀によみける 在原しげはる／鶴亀も ちとせののちはしらなくに あかぬ心にまかせはててん」。『日本古典文学大系8』(岩波書店、昭和四十七年)一七二頁。
- (18) 高橋正彦(一八八八—一九七二)、号は蓬庵(二代)・忙閑。名古屋の実業家。

〈主要参考文献〉

- 『人事興信録』データベース (<https://jahnslaw.nagoya-u.ac.jp/who/search/who4>)  
『角川茶道大事典』(角川書店、平成十四年)  
谷晃『近代数寄者の茶会記』(淡交社、平成三十一年)

が惚ばれ嬉しく感じた 扱水指ハ 土産の 茶入 老松 茶杓 政斎 茶碗 瀬戸風筒 にて淡茶を豊の

手点 数服飲喫した。掛物ハ勿論 釜 茶碗 茶杓 折敷迄 彼れに贈つた品々なるも、忙中閑を

○松永夫人賀祝の茶

十月廿九日 晴

p 502

耳翁 夫人六十の賀心祝に極近しき老人連を招くから是非参列と前々からの案内、外ならぬお祝

よとの命令で立寄りましたとのこと。好い道連れと同行す。途中の川越行きハ買出隊で寿司詰

奥さん の催として今日こそお主人ハ参謀格と思ひながら山荘に着くと、よくもお越し先づ一服差上るこの事

母家の居間を屏風で囲い 茶入 老松道安好 茶杓舟越伊豫作 茶碗 名古屋ハ勝郎 手造 菓子

干柿にて濃茶が 杉浦君 手造ハ流石名古屋著名の佐び家 舟越茶杓ハ最近奈良柳生老

寄附にハ 松本老夫人 田中たか刀自 小林夫人不参

飾り附 古鉄 鯨鱗形 銀瓶 汲出無地南京 根来盆二 多武峯 とある 時絵改造の

お相客は何れも旧知の方々、茶の道にも趣味のある人のみ。 中は紅葉した庭内林園に降り立つ

埼玉 南部人間川北端は柳瀬川流域より丘陵たる山荘は野火留平林禪寺の杜の南に続く松林

隊の潜在させ一展望の視座にある。佳景の場所、これにもませる眺望ハ、今日のお席且座席

浮び雲峰丈ハ平和の象徴とも感られる。我らは今日一日丈にも奥さんの祝日平和感の

床二ハ 後、京極良経卿 「原圃善三ハ六十の賀によみける」 「つるかめもちとせのちはしられくる」

釜 古呂屋 縁 黒柿 扱 お主人夫人の出座に続き改めお挨拶があり正客より今日の賀会に対す

たい歌詞をたたえられると、この幅ハ私の主人六十の賀の折、今日のお次客田中さんのお里、名古屋高

先づお炭があり、重餅、誰袖の 炭具もよく、 向 膾を鼠志野 汁 地みそ 椀 伊勢海老、焼物筑前浜焼鯛

飯 赤 菓子 粟饅 已上にて お祝飯を頂く お献立にもお心祝がこもり殊に香合重ね餅など心尽し

花入 遠州作、蓬雪箱 花 紅葉二 水指曲 茶入 鴻池 茶杓 庸軒作 茶碗 長次郎作 宗日箱

魯堂 建水 唐金 蓋置 にて濃茶がお手前も見事に練られ祝服した。

旧蔵 青竹切引 前席と言ひ花人より茶人の名器の出陳に至りてハ陰の主人が寛容か

お振舞に、耳庵翁の壮年時代からの華街発展を知られる老刀自方には、この尼寺茶碗を用ら

れし奥さんに対し、ご同情やら感慨やらで、何れも過去便出話の内に、広間隣室科月亭に動座

茶入代仕払について、手元不如意につき、半金三百五十金丈仕払い、迹金三百五十両ハ、年末迄猶予を乞ふ、と云ふ

お用されし事こそ、我々共の仕合であった。ここに藤沢老のキザな代点で、志野大茶碗を水指に桑の

この日子ハ心祝に包美作名月風菓子器を贈呈した。

己上昭和十九年十月迄之集を 廿六年十一月一日書了

廿八回

# ○大磯加藤家の茶

十月十九日 雨

P 500

加藤 さんの大磯茶も前夜からの大雨 乗物も制限のこの頃 少々この雨で八困難と思いが、前約は

もだし難く、品川で落合ふ耳翁の埼玉からを気づけながら時刻品川に出る。 濡鼠の如き耳庵翁と共に乗車したが、横浜までは座席なく、戦時交通の難行で大磯着、同行を約した縣君の姿は見えず、国民服の平松老に出合った。久しく会ない

老も時局柄が大分瘦おとろえたよふだ。老亦加藤さん相伴との事。

自分八大磯の加藤さん八初めて。平松老の東道にて仕合せ。お別邸八駅より間近の山上であつた。今日のお催ハ加藤岸水博の若主人正武氏との事。

耳翁を 先頭に縁側 床に 唐画戸二幅 雁渡る季節画様ハよいが餘り感服されない画 間もなく紋服姿に 然と正武氏の出席

また青年の氏は敵父同様茶道美術にも熱心、特に古筆研究中である。先々代より多の美術品集蔵家丈、今日のお催を期待した。扱お主人の挨拶にハ折角遠来を乞いし も駅弁位のお粗末な食事を差上ますと、隔の襖を開かれて大食卓二平弁当が運ばれる。弁当上にハ大朱の杯が乗られ日の丸即ち戦勝を祝す意味か。

胡摩振飯 鯉の刺身、ハゼ、小松菜とタシ

椀 うどん松茸 焼物 鯉の甘露煮 乾山 四方重二 唐かんの皮 玉葱など 露草絵アリ

終りに 南瓜丸煮二 と云ふ献立 已上は若夫人お料理とのこと、父君主人も共に相伴、若夫人に養君の給仕にて駅頭お趣向な振舞をおいしく頂く

食事が終り 庭より 耳翁 安田 予 縣 床に花入向かけ 葎枳 鈍翁朱書 花 四ツ鼓(赤い夷) 小間に 平松老お話にて 銘利休法師

釜切子 園地紋 風炉 朝 板織 水指 カヤ童 茶人 京作瀬戸 箱二 利休谷 箱書ハ庸軒と 銘利休谷 茶人 老博士ノ説

意外に印象つけられ美醜の を感じする内 茶碗 又古高麗とも見ゆ と称する大振りハ至極妙を 主人と対照にも一段の寂 銘喝子 蓋置 三閑人 若いお主人に似もやらぬ萬事が大伴び、お当家は 先々代より美を以て誇られし丈今日の道具組ハ

お手前を頂戴すると、茶名好の白と言はれし、如何にもマズイお茶にて、なんとしても咽喉を通らぬ悪さ、思い出したハ先々月古筆審美会に、自庵提供のお札に贈られし茶が之れと同よふであり、お厚意ながら打捨し事あり。大家にして最も心入べき茶を何たる事かと不審にたえなく、幸いお話が平松老の蒙服何とか呑みほしたよふだが、心掛くべきことである。

それは 兎も角若お主人の斯く大寂を敬服すると共に、米量茶碗ハ自分にも一個所持している

今日この茶碗拝見に興味を持ち詳細に見ると、胴のふくらみ少し脹み強く、高台細く切り立ち、土味も荒目に見ゆる。釉薬色目も同じ寂ハ予の方がまさるかと思ふ。

正客 耳庵翁ハ米量を抱ながら、私はこの茶碗を拝見し、他にて今一ツ米量を見し事あるが、益田さんでもなく一寸失念したが、これを拝見して思い出しましたと、それこそ予の米量である。

老博士も出座 茶人の伝来など色々茶談の末、親美翁複製の古筆手鑑などを拝見し、三時同家を辞し耳庵翁縣君と共に安田画伯に導かれ同家に立寄る。

駅より 数丁離れし画伯の住い小河に添し閑静な場所、画人の居住に好適な住い。 院展派三羽鳥と謂る丈、この住も応接間外四五の部屋、画室ハ階上らしく、庭も俗ケなく、茶を運ばれし

夫人ハ六十才に見える画伯夫人としては若い方、態度シトヤカで、画伯の穩和風格にふさわしく見ゆ。広間に通ると幅ハなく琵琶床に彩色木彫拍一台、これは予の見る目に模作品である。猶床二壺、山の印ある

住哀恐境 云々の二行、前に根来盆に火舎香炉と云ふ飾附にも美術家らしく、其の外玉腕子、昇梵芳(相国寺第一座)の蘭竹の絵、并二足利養持即ち頭山の圖、老子二似たり、馬上人物が

展示 せられたが、なかなか良い絵である。猶次に畦に豆の図、宗達筆墨画で筆者得意の墨色を表し伊年の丸印ある。雪村筆瀧に鯉の幅ハ如何なる物か頭山宗達に及ぶる物、已上意外な眼

服を得短時間二この接待を謝し、五時半列車で帰京した。安田画伯ハ古径青野両氏と共に三溪翁時代よりの知己なるも自宅訪問今日が初めて。流石当時一流、日々の生活にも其風格が惚れた。

# ○門人豊の茶

十月廿三日 夜

P 502

我門人中 只一人佐藤丈が茶の湯に親み田中仙樵老に愛せら、妻女又仙樵門下の皆伝を得ている。彼もご多分にもれず微用工として車産業に通勤中の多忙を割いて老妻と共に夜食を上げ

たいとの進に菌痛に悩みながら、折角の好意もだしがたく五時から高円寺彼れの住に出かく、豊ハ勤務先より帰らず、妻女一人で準備中。予ハ土産に自作信楽茶釜の水指を贈った。間もなく佐藤も帰り

床二 魯堂筆 菊紋章 を 自作盆二飾る 釜 園地紋 新釜 二打水もすがすがしく、食事向 大根ヲロシ 二祖の絵 香炉を 吹き

汁 地みそ 椀 干うどん 大根の 吹き 馬鈴薯の白煮、香物辛菜と云ふ菌痛に対する妻女の心入 生スイキ 小羊小松菜 工場から特配のビール一本も心の込めた振舞であった。

食事が 終わると手や顔も炭焼女の如く黒く煤けた妻女が、二三前郷里山形土産の栗を焼き初めて、これがお菓子と即座に皮を取り温いのを進めてくれしは、時節柄のみか、利休時代の茶菓子

○柳瀬山荘口切の茶

十月十七日 火

P 497

南洋 洋上に於る古買山本の両司令官の戦死に続き、昨十六日台湾沖、沖縄島の敵艦隊大編隊、無数の艦上機の猛攻は、最近稀に見る大激戦、沖縄に於る島民の受けし損害、八家屋の焼失

七千八百有余、倒壊家屋六四二、死者一四三と云ふ惨害を被つた。然し台湾沖の海戦に、敵に甚大の損害を与へ、其の編隊三部の一を撃破したと軍の発表に国民ハ歡喜しているが、台湾被害

は未発表、軍は不利にあえく我戦況に対する志気昂揚の為此の報道にも不安がある、敵ハ比島に於る我が輸送途を中断せん為の行動は云ふ迄もない。

耳庵から 口切を催すから今日正午迄にお出あれとの事、十月中は口切にハ少々早いよだが、山村住いの淋しさから人恋しさの餘りの催と思ひ出掛る。途中池袋にて縣君に落ち合ふ。

十日 前とは杜も野も秋は深みつつある。田甫の獲入、乙女や老婆の立働く中を白鷺の群が飛交も、絵巻に均しく情景豊である。この野趣を見てもまだ名残季節なのにと話す内山荘につく。

時刻ハ 早目耳庵翁ハ半頭相手に榮しげに準備中。翁ハ名残を逆に口切を差上たい、お客に頼むは興味ないが、花丈園内で見立ててもらいたいとの事。今頃野草に口切花のある訳がないと思ひながら園内を探すと、流石タシナミ白玉三輪を見つけた。花丈ハ申分なく、間もなく今日のお客

お合客は 塩原末日翁、近藤滋弥同道参着、続いて服部山楓氏も入来、お話ハ縣君にて

母屋敷台 より入室すると、疎開荷物の英国製古風な洋間用椅子テーブル、この板戸に、信実と称する縣君の賞讃した人丸像が掛つている。自分ハ承服されぬ画

長テーフン上<sup>(ママ)</sup> 用意、名残ならぬ秋の、茶道新体制を主張せられるとハ言へ、この無軌道根菜六角盆二、桜湯の、口切に桜湯とは

ぶりに驚いた。間もなく主人の迎いつけに、長露地を、空はドンより雨を氣遣いながら席土肥二三の遺構且座席へ近藤男を、先頭に、前軒端に一本の柿も既に落葉しながらだ一ツ、

萎れし葉つきの残りしも風情とよく見れば、それ又紐にて結んである。吹出したくなつた自分は、去年夏、島山さんの忍草池朝茶二蓮華植込の芸苗を思い出し、それにハ耳庵の茶道三年著作

中にスルドク非難されてある。興を添へるも面白いが、この芝居がかりの雑技には笑わなくてはいられなく、さて入席すると、

床に 無<sup>(ママ)</sup>準、山澄、嚴松、時代、ここにも新体制なるか台目柱内水指座二、師範、墨蹟、旧蔵、地紋、黒柿、和蘭陀勝虫絵香炉、金地蓬萊山香合置き合

と言ふ異様な揃いに目を見張る内、お主人出座、改めお挨拶の言葉に、勝虫香炉ハ昨日発表の戦勝を祝して用いました。お炭ハ新体制で省略します、香ハ炉中でなく香炉にと一柱さ

れた。珍しい作意である。香器、懐石、地みそ、膾の向、器ハ扇面形、椀、鳥の水焚、焼物カ、マ、ス、干物、織部鉢、拝見後、小茄子、新物、

八寸、伊勢海老、湯、針、香物、小蕪、酒器、銚子青磁獅子蓋、粉引徳利、杯三種、姿むし、生ガ、沢庵、

口切、献立にハカ、マ、ス、干物、味噌アエは受け取られぬが、之れも新体制か、要は物の不足、それにして、も東京から一流大家を招き、口切の前ふれには餘りの簡粗すぎる。

菓子ハ、お手製、これは至極、結構であつた。この頃より雨となつた。茶事の秋雨は一入閑寂をそへ、中立ハ腰かけに、一閑手附に志野の火入。

お自慢の、銅羅も巨羅の近き為魚住銅羅の響きの深さ、床の花入、銅菱形花、白玉二、を聞きつつ再入席すると、

挿されてある。白玉の葉の採り過ぎが、水指、木地、茶入、薩摩、茶杓、空中作、茶碗、目に立ちて淋しく、曲、茶入、銘望月、八十一才の刻名、

斗々屋、建水、と云ふ、組合せ。水指曲に建水又曲ハ兎も角、茶碗斗々屋は良い茶碗ながら名残にこそ良れ口切にハ不適な物である。

茶の本山を自任される翁ハ点前中に、従来ハ茶入の牙蓋をタトえ道具置でも置くのは不潔と考へ、私はこれから裏返しに変改し又茶杓も畳に置くよりフクサにのせお覽に入れるよふ致しましたと、利休この方の型破りの披ひに之又横紙破りとも言ふべき見るから

の無茶ふり。ここにも耳翁の性格が発揮せられ只啞然たるのみ、斯くして濃茶ハ練れた無準の、長講話を聞ながら、移る、床に、光悦巻の、「神無日の御室濃こそすえいかなら無、断簡の歌、なへて野山もしくれすこ略、」又二首

「龍田山あらしのみねによはるらむ、白紙、翁の、金銅緑時代盆に飾られてある。わすらぬ水もにきたりけり、忍草、能面、番茶など振舞あり、近藤塩原両翁ハ退

去され服部氏我らは述に残り、小貫入茶碗にて奥さんを交へ淡茶を啜りながら雑談にふけり、又も茶道革新論を聞かされしが、五里夢中で不明であつた。帰途ハ幸い服部さんの車に同乗し

雨に霞む川越街道の宵闇を一路帰宅した。時に七時、無人の自宅ハ兩戸を引き人のケハイなく、留主の老婆の姿さえ見えぬ。さてハ停留場に迎いかと電車道まで出掛ると傘を持って一時余も待つていたとの

事に氣の毒な思ひであつた(茶にふける人を待つ身の秋雨よ)

ズイキ 味ぞ 栗飯 鉄鍋二 煮込、焼物 強ハツ頭 魚 八寸 百合根 香物胡瓜  
細切 魚 雲丹 枝豆 薫製 茄子の浅漬

酒器 粉引の 絵アリ 杯架附 已上 食器ハ 徳利の外 全部 意図が古器にとられず新  
片垂 捻外 新物揃い丈 機軸発揚も時節柄らしく

院の 歌仙切ハ今日の正客にもお秘蔵されあるも このお幅 が秀れしよふ感られる。  
お宸筆を前にて唐懐石を頂く光栄を思ふ

う内中立は腰掛に 雨に潤ふ庭園 庵主の 再迎あつてに 向懸花ハ 白  
ここに胎掛団子が運れる たしなみ行き届もゆかしく 後席ハ 寂

山芍薬の美 近來 見事な 書院へ 炭具 炭斗時代 皮組 鉢入 象眼 釜敷 時代 灰器 茶  
かる意添へ お花 飾り 火箸鉄四角 飾り 簾組 灰器 茶

水指 備 茶人ハ 竹 袋 和蘭陀 この中次は侘びも 唐物園とあるも  
前 中次 木箱 ありこの種中の珍品 和作竹材にて唐漆風の塗り面白い

茶杓 歌銘 筒に 「あずしあふみさすかにかけて堂のむにハ」 竹ハ寂び竹 茶碗 斗々屋 作行  
州 遠 かなかもつらしかくもうさし 室甫 にて 茶碗 太侘び 強く

高台廻りヘラ目 この茶碗につき面白き挿話がある。元舅ご塩原末日庵所蔵なりしを服部さの物数寄  
広くその為一筋見ゆ。 から、物こそあれ自動車と交換せられし物と、不思議のよふであるが、今より廿年前なら自

動車も千金餘りで買へる時代、其頃既に山樞氏の観識と物数寄の為、この得物こそ正にお舅の敗  
北である。末日翁亦愛婿可愛さの為と茶道に引入られる策略かうでもあらんと、昔語に一同大笑。

何れにしても名残茶碗に申分なく、水指茶人寂茶杓共二侘びに徹した振舞ハ、廿年のお主人末お  
そろしき御手腕である。老大家の連客三十■を喰った態たらく。さてお開きハ奥の広間へ

床 其一筆 床脇 野の宮時絵 を飾られ 道具置にハ 引出し 附箱棚 瓶掛 已上により揃い  
彩色七草 小厨箱 白木造り ありて淡茶

茶人ハ ひさご形 時絵 茶碗 ハ お自作 替 伊羅保 本茶碗 黒茶は過る夜山樞氏持参夜襲の  
三保富士 黒茶筒 碗形 折初見し是非耳庵翁に一服と進めしが実現

した訳、只新趣向木地仕込小棚は何としても小児じみしは前席老大家をしのぐ振舞とは、甚しき  
相違にて或ハ異表の表現あらんも、今少し何とか趣向のありしならん物と考られる

お番茶 水菓子などお接待中 歌合巻 の披見があり場所は井ノ頭閑寂裡に清談興にふけり、時の  
宗中筆虫の 過ぎるを忘れ、深きお持成を謝し連客と共に東上幅庵した。

### ○初秋の武蔵野耳庵翁を訪 十月九日晴

数日前 の大雨後日本晴れの秋日和を幸い、井の頭に於ける服部氏の茶に耳庵翁が鼻水たらし  
ていられしが翁の鼻水ハいつもの事として、気にもしなかつたのに、翌日から発熱病床中

と聞き、この好日に見舞かたがた初秋の武蔵野を賞せんと、弁当パンを用意して出掛く。  
田舎は今陸稲の刈採甘藷堀りの最中、それを目当てに買出部隊の行列、田舎道ハ何

と云ふても長閑である。柳瀬川まで来ると、南埼玉に水田の少なのに、この附近から下流八僅か  
ながら田圃が開けている。水田にも鎌入に農家丈が昔に化る。米食かと思ふと、携へしパン弁

当が重い感さへされる。山荘に着くと、まだ病床中と思ひし耳庵ハ、日当り好き縁側に  
て、茶の湯に関する時局即応の法式につき、自己草案の草稿中であつた。

縁側 ハ前日の大風で落ちた栗干で雑然。  
突然の訪問に翁の喜び、早速千代子さんに命じ栗絞りの菓子が出来た。

囲いの壁二 道六より 「雨ふりつつき候へ者■の手造に山の芋少々 蔵六花挿  
利休老への 差上候昼後は土門氏へ出来候必■御光来相待候かしく」 利休老 と云ふ文が残る

何と云ふ即興適幅か、耳翁の物数寄は、時二応じて如斯蔵幅の用意、茶友の興味はかくあるべき  
ものとぞ感られた。

病後の 疲勞も忘れ 水指ハ 南蛮 魯堂旧蔵 茶人 二代 宗哲 茶杓 如心七齋  
蔵から取出されし 芋頭 作 茶碗 唐津にて

濃茶を振舞れた。茶は不時の来客に対する心構こそ肝要であり興味を添へるもの。一人  
一客にもこの振舞のゆかしさ二即興器器物の取合せに巧みなく如斯面白く出来る物である。

間もなく茶にふける内 お昼となり食事の用意もされたが、パン食の用意ありと辞退をし  
たが、パンは孫にお揚したいとて卓を囲み野菜料理を頂戴した。

都会放れのこの山荘時局の雑音も聞かず、井の頭の茶談などにふけり秋色を賞し  
閑話の内に亦一服と

長次郎作 する 黒筒茶碗 にて茶を振舞れた 尼寺又ハ志賀寺に似たる出来  
早雲と称 此の茶碗ハ其肌合 にて寂もあり近來の得物のよし

かれこれする内三時を過ぎた。翁の静養を乞い、土産の甘藷包を杖の先に肩にせおい  
裁松老人ならぬ巻ケートル野人姿で帰路についた。





方... 是... 七月 十九日

○ 海軍大臣... 七月 十九日

池... 海軍大臣... 七月 十九日



蓋... 瓶...

海軍大臣... 七月 十九日

一... 十月 一日

○ 報... 十月 一日

報... 十月 一日



蓋... 瓶...

海軍大臣... 十月 一日

○服部山楓氏持ち込夜襲の茶 七月九日 夜

P 490

佐世保 軍港を目標に北九州にかけ敵の大編隊は今晚二時に大爆撃を行った。帝都爆襲も身近に逼る此頃、昼の炎暑に夜は二一スに耳を傾け夜半の敵襲をおそれ早寝仕度にな夜具を敷きし

頃 服部正次氏から一品手に這った これから茶箱を提げ菓子も用意で出掛るが如何との電話、然も同行一人であるとの事。東洋一の時計会社も今は軍産業と転換に多忙の社長山楓氏が、茶友としてのこの老人への厚意もだしがなく、心良くお持ちを約した。盆前として床に仏画を掛けてありしも、茶には不向き。少し季節に早いが光広卿女郎子短冊を掛け、花入籠に庭の雁皮花一輪を掛け銀瓶に湯の用意

妻は涼を取る為庭の打水して待つ間程なく 其伴ハ 元伊勢丹の店員養君であり知人であった。八時と云ふに同伴者と共に参入された 夜とは云へ暑い折上着を■してくつろぎながら氏ハ

今夕養君も来り一服淡茶でもと考へたが、同じ呑むなら貴老と共に啜りたいので空襲ならぬ夜襲を掛けた。この急襲に拘ぬ、露地の打水、お床の光広女郎子句と云い雁皮の花迄お心入れは恐れ入ったと

如才 ない挨拶と共に 菓子 羊かんを自ら して銘々盆に 茶碗 黒茶風 茶杓 二ツ折 手製であるかと 葉子 青葉迄用意 新作

茶入 桑 木地 茶碗 筒 茶杓 二ツ折 新作

さて一服拝服し茶碗を見ると サテハ 山楓氏お自慢自作とおぼへたので、鑑定違はお免を写は出来ず、私の拙作丈届いた。大樋の葉かけ面白からずとの事に、予は同意せず、袖かけハ成功

其訳ハ寒月のよふに、堅に白釉を刷毛ては普通、横刷毛を施したの大樋としては大成功のみならず季節にさらぬ名出来をたへしにハ満足ゲであった 猶この茶碗にて当時同席の耳庵翁へも

一服お進めと云ふと話ながら 小林如泥、作と鑑定し、之又適中した 蓋に不味ハ朱書 呑凶軒 の如泥刻名がある

如泥、ハ 松平不味公に其の名工手腕を愛せられ、公の庇護の元に大くの名作を遺している近世稀に見る名工、彼れは酒豪の為、酒をあり路傍に傾れ前後忘却する処より、公は彼れに

如泥と云ふ号稱を与へられたと伝ふ 服部氏の 今宵の振舞こそ中閑をささる茶友を慰ん 為の韻事を深謝し十時を過ぎ辞せられた。

茶事ハ貴賤をとわぬ風事

○我庵に於る審美会 七月廿日 雨

P 491

中村両氏から古筆研究審美会今月当番が加藤正武氏であるが、会場の都合上自庵提 供を求められたので、趣味のつどいなり何れも知己の方々故快話した

従つて掛物茶器等何れも持出し今日ハ亡兄の忌日とて朝より松花堂消息佐川田喜六宛盃蘭 盆についての幅、奥には不動尊など飾りしもそれを改め

茶席にハ 時代連形 霞ひさごの鉄瓶 丈を用意して 朝八時二 田中親美、福田君を先頭に養君、 鉄風炉 待つ 中村、加藤、服部氏を後■りに

中村氏ハ 広間に亡兄筆と青磁 出品炷香せられた。 当番加藤氏ハ 基俊の 盛夏の 竹に双雀の幅と香炉 小間床に 歌一首を

茶入ハ 鈍翁好 茶杓 四代尚好齋 茶碗 薩摩ノ筆洗 と云ふ 極めて簡単な道具組にて 薄茶器 作 片身替り 茶丈ハ自宅提供して養

君の手前にて淡茶 是非 一服と所望せられ、亡兄を偲 茶碗 魯堂作銘 替 中村氏より到来 一巡の後 予に對し ふ意味から 破れ衣 瀬戸唐津

茶杓ハ 加藤氏のを 淡茶を供し 広間にてトマト番茶など真夏にふさはしき物を呈し 古筆に對する親美翁の講話あり清談後十二時散会せられた。

○縣君に引ず羅礼柳瀬急襲 七月廿九日

P 492

池袋駅にて縣君と落合い柳瀬狂行き、途中車上より見る溝道ノ畑は数日前襲いし降電の為、見るも無慘な 被害甚大である。野菜不足の折 天は無情である。志木からの畑道ハ今甘藷の葛かへに、村の乙女

は手さばきもあざやかに働いている。予ハ縣君をうながし乙女の側に行き、其ツル返しの効果など聞くも野良情 緒、厚い野道を進む中、自転車上の老人が広尾の仰木さんかと声を掛ける。見るとそれは町内住木下薬局老主人

である。老は車を降り、私も大和田在竹間沢部落が古郷ゆへ、兄の山に小屋を建て、東京の店ハ若い者に任せ 疎開労働小屋も出来ましたが、電燈が引けず、石油ランプと云ふ原始的生活、之れから志木迄石油買と

如何世の中ノ深刻を思はせる。老は又この先から小屋が見えますと道を後戻りして遠くの杜を指さす。 縣君ハそれを見て、先達古怪青郵両画伯とあの屋根を見て、良い場所に茅葺がある羨し

さお噂しましたと、それ程杜の丘より柳瀬の土堤見渡す田甫、武蔵野を視野に納める好地位で ある。急がぬ道として町内の知人に田舎道の対話の嬉しき、扱山荘に着くと突然の訪問に翁は

には申なき 長次郎作茶碗  
志賀寺宗日書付 裏に 志賀寺 志賀とある 已上特に 拝見を得た事と大雷雨印象深き茶を頂き  
茶碗である 新作青竹花入を紀念に希望して退散した。



### ○耳庵来速興の茶

六月十三日

p 488

降るみ 降らずみ入梅の特徴が朝から陰鬱 電話にて 丸岡帯同これから小田原行きの途次貴所  
なな太合に突然耳庵翁より に立よるとの知らせにて

團家 鷺の幅を思い出し 探幽筆 雨中の幅を掛け 唐物古瓢花入に  
故梅沢老遺愛の 芦二鷺の幅を掛けて待つ。 庭の夏草を活けて待つ。

間もなく両老共大抱を掲げ入来せられ、実ハ茶と菓子とを携帯した。ここで一服しながら、過日の  
鼻山團家の茶会模範など交したいとの事にて、朝からの風炉の煮へと落着く

茶人ハ 翁持参の 茶杓 自作銘 唐津 又翁よりの ここへ又老妻速興の  
余三の中次 茶杓 かたわれ月 茶碗 朝鮮 菓子 羊かんにて 焼菓子添へ

濃茶ヲ 練り吸り合いながら茶談に過ぎたが、例により翁一流の酷評があつた。然し茶は其人々  
の地位の環境雰囲気による者 田舎家囲炉裏侘び茶と同よふの比評丈では

即ち知即安分にもかなはぬことを述べた。扱茶が終り 茶杓掛見があり翁ハ之れは氏郷作にも似  
たる名作 是非希望とあつたが 予は

この杓こそ近來の快作と愛玩せる丈 調を求められ し杓とテイ良く断りあやふく難を免れた  
翁にセヌられてハと、実は他より筒新 折しも目白夫人から岐阜郡上より

鮎 送附の通知到来の知らせに翁ハ、此鮎にて知友を招きたい、先づ井上侯 團男 田中翁らと決し  
速座に電話交渉 期日ハ十七日正午と決し他ハ丸岡老と予の相伴、出来れば服部山楓 中村

氏を交へたいと一決し翁ら二人ハ小田原へと辞去 時に正午前  
世界戦ハ枢軸軍と益々不利の一途を辿る。

北九州 工業地を襲つた敵の重爆機ハ今払暁小笠原列島ニ襲撃の為警戒報が発令された。柳瀬の招  
きにハ服部 中村氏ハ謝絶、予も警戒報中と躊躇したが、思い切り出掛た。

志木からの田舎道 人手不足に増産を勤む農家にハ麦の刈入れ 稲床用意に若し連中の姿も見えず  
大方が老人ばかり。狩り立られし壮年留守を守るハ年寄のみ。氷川の杜程近き坂道を降るとリヤーカーを  
挽て道端に一人の老人が車上の家畜飼料を積んだ車を眺め、イカにも疲れてか寝ころんでいる。自分ハフト  
この老人に声を掛け お爺さんこんな荷物を挽てお疲れだろうと行過はしたか何となく気の毒に思はれ 坂

の上迄後押しシヨウト話すと旦那はまだお若い私ハ七十にもなります。若い者ハ天皇様の為に兵隊  
に行き迹ハ八年より斗りて苦勞をしていますがとこちながら、自分ハ坂の上迄汗だくに後押の奉仕 喜ぶ老人より  
自分の気が良さ、こうして道草喰いながら神社前くると昔から田中翁が声を掛けられた。途すがら  
今坂の上に老人の農夫が草むら寝ころび、如何にも疲れたさまであったとの事、実は後押一件を話し  
都会人のみか国全体老人迄が苦勞のドン底に茶の湯など控へなくてはと語る内 柳瀬荘看。

七人の案内に井上侯迄が警戒中とお断り 團さんハ非常仕度と丸岡老丈の四人

母屋囲の間 屏風に 短冊 早苗 云ふ 椀湯と云ふ翁一流 團さんを 先頭に丸岡老お話で奥の  
浄弁 とる

床二 公任 さつきやみこのひたかげに 三溪翁 旧蔵歌 釜、古筥、梅地文 予の 風炉ハ 宗四郎作、  
筆 もゆるひは云々の をかけ 眞形 焼物 岐阜郡上ノ 器 織部 名鉢に 炭倉略にて

懐石ハ向 胡瓜椎茸 器ハ 四方 汁 地味そ 椀 玉子豆腐 焼物 岐阜郡上ノ 器 織部 名鉢に  
胡摩あへ 胡摩あへ 志野 汁 茄子 焼物 若鮎 四方の

進魚ハ 雲丹 煮魚 小羊空豆 八寸 花胡瓜 湯 針 香物 お湯 酒器祥瑞蓋鉢子  
会傘 小鉢へ ヒジキ 鮭燻製 ショウガ 德利備前緋襪 杯 染付 瀬戸

菓子ハ 千代子若夫人 と云ふ お当家にハ目珍しくも 香魚かおり豊かな若鮎の佳有に美味を  
お手製太切 と云ふ 本格的大お奮発の献立 賞し林間腰掛に中立

魚住製の 銅羅七点に 後席床二花入 雨トヒ 見立 予楽院 野草二三色が清く活られ  
引入られ 立桶 筒書二 銘雨月 雨期に対する筒銘もよく

水指、備前 茶人ハ 新兵衛 茶杓、唐軒 茶碗、蕎麦 建水曲 にて濃茶が練られた。お手前ハ流儀なく  
矢筈 肩衝 作 平 耳庵流 独自の面白さの豪傑ぶり

お正客 家にハ新兵衛作 ありそれを承知でこの肩衝は透歌しての作意か、茶碗ハ無疵と大振  
銘 山雀と云ふ 銘茶人 り申し分なく、水指ハ定評ある良い物、この備前を予がハ札にて推薦

した頃迄ハ少々不満で三四年一度も用いられざりしに 数度の出現 である。扱その頃より窓外雨声を聞  
原三溪翁蔵と比較され翁より激賞されて以来 露地傘に身をまとい広間へ

床に 信実歌仙の 書院二 神代 と云ふ 風にていつになきお振舞も緊張せられしは、去る六月の  
巻頭住吉の絵 三箇銘 お正客茶に対するお報いと思はれ相伴連にも気持

よい一会であった。お開間の茶談に美術談或ハ時局に対する美術品保護方法と暫く清談  
と共に危愛事態の推移に時を過し、降しきる雨中巻ゲートル姿に夕刻帰宅した。

お道具 組合せも仏縁に因みしお心入れ、これ程のお催を今日の一会に時局柄にもお催しを得  
た事ハ現在軍事産業に多忙を極められるお主人の自己欲案の為ならぬを考

へ自分は深く銘記した。扱無筆骨頂の図ハ、普通肖像画に見る大幅でなく約巾一  
尺程の小幅である丈小間の床にも適幅である。釜の肌の好き、鉄附も面白く、尹部手桶形

水指 は稀に見る型にて喜しく、茶碗ハ色目枇杷色にて井戸に見る釉薬の具合、古高麗の堂  
々たる物に宗長翁の良く取り合いしには敬服した。銘の観世音に至りてハ猶更である

厨子 披露の為かく迄山お一家の款待振りを得た事ハ参列一同深く其のお厚意に感謝  
せられ予ハ一段の面目をほごし夕闇せまる頃一同退却した。

## ○千駄谷團家の夜会<sup>(2)</sup>

六月六日

P 485

米英軍 が北仏上陸を敢行の報伝る で参入 すると、門前にて今日の寄附ハ  
今日團さんから夜食のお案内 千手院との事にて玄関より庭を先ず御堂に  
下す<sup>(1)</sup>。

詣す。 先公時代赤星家より移建せられし 乾漆 阿弥陀坐像が安置せられ、護摩壇にハ仏具皆具も  
御堂にハ平安上期の 備い特に先公と奈良巡遊の折 予が推供した鎌倉時

代鍍金の輪宝など壇の四角に飾られ、本尊右側壇上にハ先代お信仰の鎌倉期の不動明王の

尊像、左壇上にハ弘仁時代十一面観世音像等が安置せられ、尊くも壯観である。猶

御堂前にハ 江州某寺旧藏鎌倉時代石燈籠ハ、其形式と作行の美ハ海に堂々たる名石燈で  
ある已上を拜し千手院待合に入ると、

この千手院ハ 一部仏堂式な構造にて、凡ソ径尺八寸に餘る鉄輪人大円柱が中央にある。この壁床に  
(稚児太子の像) 着色鍍金蓮華台坐像が掛り

鎌倉 時代陀羅尼 一卷 額彩色 宝相華刻花足 此の軸盆ハ陀羅尼経ノ為  
壯嚴経 十羅刹 が白檀 金銀螺鈿嵌 軸盆上に 先公より特に予に依頼

製作せる天平式 である 猶稚児太子の像は、当家藏木彫立像阿弥陀尊体内より発見せられ  
し平安朝期の各仏画ナリ

次の間にハ 金地小屏風 風炉 時代蓮花形 二 叢地文 根来 汲出、振出朝鮮唐津  
にて構い 五葉 鉄瓶 時代 盆二 根来の出し台が備

へられてある。猶仏画の前にハ 扱お台客ハ 松永耳庵、親美翁、中村好古 此の人念待合のさまから  
唐物香炉と云ふ飾付 伊勢の服部君に予の五名 もお先代に對す供養

気分が現れている。程なく長露地をお主人のお迎つけに、服部君のお詰で順次、新建せられし  
新席へと繰り込む。お当主が茶に親しまれし以来急速に露地改造せられ、躰前には

孟宗竹 の種込青管のすがすがしく狭い開いの内にも主人好みの趣味があふれ、所謂破竹の勢いとして  
も云ふべきか。空は初夏の雷雲がシキリに去来する中を入席すると、

床に 青竹の切立 大山蓮 が葉組もよく 各器集蔵のお当家にしてこの青竹花入を用いられ  
尺八花入に 挿れている。しは露地の青管を用い新機軸の発露と見える。

この作意によつても御主人の 風炉 唐金 釜、住吉釜ト 書附二 此釜ハ住吉屋宗無所持、信長公名  
新英茶略を敬服する。 切り合 称する 物記二有之中西土佐二伝来、三条

釜師西村三右衛知哉 太郎庵 源良 扱お懐石ハ 鯛巻 器ハ 祥瑞 汁地みそ にて  
添状文由緒書二通有る 所持とあり 利休折敷にて 向ハサビ 平皿 小蕪葉つき

焼物 サワラの 器 新物 強魚 若鳥、ウド 重箱に 箱根菜園の 進魚 雲丹を 湯八寸ハ  
ブツ切 手鉢 生湯葉 青豆添へ 省略された

香物 アチャラ 三島の鉢二 酒器銚子 杯三ツ組捻 菓子お手製 お粗末な食事との前ふれも似ぬ  
漬を 祥瑞鳥ツマミ 水羊かん 珍味のお献立をお主人の給仕で頂く

其頃あやぶんでいた空は地軸もクダけん大雷雨となり、附近に落雷忽ち停電と云ふ有様。若  
しこれが敵の空爆であれば一連往生この世の物ではないかと其の物凄さにおびえる

こんな 訳で中立は廊下 彩画合天上 支那六朝時代の石仏、平安朝の仏像、青貝入書架にハ  
外椅子間に通さる となつて 唐時代土偶などが陳列せられてあつた

後席床二 津田 宗及の短冊 「よそにやはすすすしきかけも夏の夜ハ なんと云ふ季節適切な歌味の深さ  
あくるも志らぬ箱崎のまつ 宗及 先公博多お出身と云い、天正の頃秀

吉名護屋出陣の折宗及 休らと共に箱崎にての茶の湯 を催せし頃も偲ばれて嬉しく 水指ハ 古瀬戸 茶入、古備前緋  
筒

袋 ■漢 茶杓 江月作 とある 茶碗 高麗 建水木地曲 以上にて 濃茶を頂く、お手前  
東 筒二江月和尚 松籬 青竹引切 も至極あざやかに

小間の 茶が終つた頃 宇宙の自然大雷鳴も静まり雨も小降りとなつた。露地の風情も雨の為一人である  
お広間に動坐すると之れ又 床に探幽筆雨中に驚の幅、この構図ハ

横降の雨中に驚二羽 を見せた 頂上幅が驟雨一過の直前に速戻した幅が掛つている。これこそお主人が  
上部に八月を絵きし変化 俄に襲いし大雷雨に如し予定の幅を変更せられての速戻と察された。

床内に 時青磁 花入に 卵の花が 琵琶床二 時絵の 土風炉二 四方 水指、御本割 茶入 唐物  
鑑形 活る 硯箱 釜 権兵衛作 巡服した。猶予ハ電話で希望せる

茶杓ハ牙 茶碗 染附片身替 替 出雲 已上美代さんに代点にて干菓子麦粉打物でお淡を  
鉄砂種馬の絵 権兵衛作

長次郎作 茶碗 銘志賀寺 拝見を乞い、心よく展示を得 この 黒茶碗は袖掛り厚く火度強き  
茶碗 ため茶碗は袖掛り厚く火度強き 為茶碗ワキそれ丈寂も深く作り

# ○般若苑厨子開扉の茶

六月四日

P 482

白山家より依囀に依つて昭和十二年着工以來滿四ヶ年をついやし努力精進して昨秋漸く全部が完成し、其本尊阿弥陀如来尊像も知友美術学校教授関野聖雲君に囑し白檀材

にて見事昨秋出来を見た。同家でハ其の勞を慰めん為関野君ハ元より予の知己や同情者を描き厨子開きを予の都合でいつても催したいとの厚意であったが、時節柄其の期を得ず、時局ハ益々非なる際、極少數に留め今日お催を願つた

小杉君ハ郷里旅有參、老婆ハ又名古屋行不在の為、出席（松永翁お夫婦、田中親美、稲木春千子、田山博物館鑑賞會、関野聖雲氏、前田博齋、予）

時刻前 松永翁お夫婦が道順として立寄れしも、同行する関野君らの遅着で前行を願ひ一行の到着を待ち正午般若苑着、先づ般若苑広間に通ると

床に 一休和尚、諸悪無行の 一行に時代、名花、が挿れてある、広い園内にハ先着の耳庵お夫婦に田中翁ら大籠花入、に敷色、が道通中、間もなく田山氏も來着

耳庵翁を正客に お主人 お夫婦から改めお挨拶あり、仰木君が寢食を忘れ完成してくれ、本尊も関野教授の努力により予期以上見事の本尊出来し、白山家の家宝の一個と

云ふより国家的名厨子を得たのを喜び、今日皆さんと共に両君を謝し、并て御挨拶の皆様に改めお覽を願たく時局の折お招したが、何の振舞も出来ません。粗末なお蕎麦を差上ますと予に取り光栄な挨拶

がありお夫婦 膳ハ 春日の 蕎麦碗二 無地、葉味入、銀子ロリ、にて銘酒の進もお二人にて一巡後に膳部のお進 膳ハ 日の出盆、蕎麦碗二 時絵、添へ、お主人も相伴の坐につかる次いで

夫人の運びで時絵二段重二 山海の珍珠二組 が進らる。この際八田君酒間を斡旋す。続いて大平鉢に 鯛の刺身に 色どりよく、運ばれ亦一巡お酌を勧められると云ふ接待ふりに耳庵翁初め、これはこれはと

雲泥の相違、予は松永夫人に向ひ今日は何かの辻占でもあるよふですと顔見合せ微笑した。これで終りと満腹によい気持でいると之ハ又朱の蓋附大食籠が持出れた。一同ナンデあるかと注視すると

笹巻寿司 が山程盛れてある。鯛鱈アナゴと云ふ見事なお寿司、お主人ハ庭園の笹を用いたと、成程庭内にハ熊笹が密生している。満腹と遠慮しながら、正客又五つを取上られると云ふ有様に

て蒙服の間へある親美翁はこれはこれはとばかり重分な飽食ぶり。他の人々又のがすべきや、いつか大籠ハ空となり愈々お湯でも出るかと待つ内、意外にも、純阿写ノコウ風赤染皿に又天婦羅キス、アナゴ、鯛、シヤコと

云ふ大盤振舞に然もお替り迄出ると云ふ次第、互に満腹と云いながら品を替れば又何とやら、最後ハ客の方からお断りする程の大馳走に私ハお夫婦のこのお欲待に少なからず面目をほとこし心から感激した。

食事が すむと庭から この広間と称する建物ハ、十年程前元加州、横山勇爵、家の二間続き唐木広間へとお案内、前田家の重臣、手摺付一間見晴廊

下附にて十二畳一間半床、又長十二畳外廊下、豪壯な、建蔵物にて、当家々人はこの書院付、地袋棚構へに、次の間、極彩色襖と云ふ、建物を御殿と稱へている。

般若苑ハ、其の名の如く元奈良市外奈良坂所在の巨刹般若寺中現存建物中の最も古く、伝はりし庫裡を移建せられし為の名称である。

この般若苑より御殿大広間に通ずる、長さ七間余の長廊下にハ織部瓦の敷土間となり上屋附となつてゐる。御殿次の広間西側花鳥繪着手襖四枚の内側にコンクリート防火室

鋼鉄捲上戸扉内に厨子は安置、され不慮の災害を防ぐ完全な装備がなされてゐる。廻が今日はこの厨子ハ、

大広間床上に安置せられてあり、内部ハ本尊阿弥陀如来丈、附属金具類ハ、前に中尊寺形螺鈿、春日卓、書院に陳列され

祖先靈牌龕合、二基及び、普門品、写経、二巻は、鍍金宰相華透経筒に納、田中親美翁、壯嚴台紙、之又二個が

堆朱巻物益と共に、この展観に、觀者の弁をはかられ如斯お取扱を得た事ハ、写経の筆地袋棚に飾れてある、者田中翁を初め、関野君及び厨子ハ元より其全部の

意匠構造迄、托されし自分にハ此上なき光栄と感激に耐へず、只経筒及内外の金具調製に努力し良く自分の意見を用ひ製作せられた小杉君の不參を遺憾に思ふ

側に備えてある懐中電機を用ひ内部の時給螺鈿の手法等詳細に觀察した。前田、稲木の両君ハ元より博物館田山君など斯く迄とは想蔵しなかつたと見え、多少意外の感に打たれしよふであつた。私ハこの厨子依囀以來滿五ヶ年になんなんと一齋のほかの製作を排し一意この厨子に熱

中し一面白山氏お夫婦の寛大な依囀がこの成果を得たことに改め感謝にたえない、自分はこの製作に対してハ工芸家として将来に残すべき作品と感念し利害を抛擲し身血をそそぎし為今日の不健康をかもしたが、作者にとり今日程否永遠の喜びないと思ふ。

扱観覧が終り、大廊下に出て各自唐木造りの手摺により、亀ヶ岡の名園を眺めながら、奥さんのお進られたお手製の菓子を取き、お召上り後ハ庭よりお席へとの案内にて

松永さんを先頭に茶席毘沙門堂に、この間田中翁や関野君らの初參の人々と共に小流の石橋を渉り庭内を一巡し、流の躡に身を浄め順次

入席す、床にハ、利休所持、無筆、臨濟の、表装中綾文白地、古織伝來、前田家旧蔵の、師範、上下浅黄紙、一風白地印金

釜、古唐屋、鈎、附、筒形、風呂、宗四郎、作、水指、備前部、蓋塗もの、猿地紋、茶碗、銘、高麗大振り、茶山可齋所持、とある

茶入、宗長小棗、茶杓、銘、松花堂共筒、茶碗、銘、高麗大振り、箱二多可屋より

已上の外、床に銅柄香炉を、香合、藤原時代、を飾られ、お濃茶が練られ、一同お手前を巡服した。青漆内朱の盆二、蓮片、彩絵、

広い待合に 合客の姿も見えぬ 田中親美翁 到着さる。久しく会なかつたが、翁も大分時局やつれか、それ  
すると間もなく 共昨年來若く夫人が出来てのたたりからか衰へ氣味

今一人相客あるとの事 それは瀬津君、これが又延着 待合にハ其角の筆引舟の画 少々あやしい物 玩具のような小さい  
風呂釜にてお湯

先ツ三人は迎られ庭に降り立つ。春雨降しきる庭園も流石のタシナミ手人も行き届き初夏緑に  
雨をふくみ好い気分の中服の御堂に詣す。立像の観音像に経筒に白い花 仏具など整ッている

この雨中御堂に案内せられしは、今日の催しが御堂落慶供養の茶である事を迹で聞された  
丘を降り新席小間に通ると

床二 公任 不耐 賀忽成御号解除 云々の 五行、田中さんの説でハ公任と云ふより行成ならん、但し  
筆 懷紙文二 抜筆意如何 道各 前後の文字に脱字又ハ消し多く翁ハ諷詞であつたが

釜ハ 芦屋 風炉ハ 炭を略し 折敷二向 鯛の 器ハ 乾山写 汁 地みそ 水辛  
梅地文 黄銅 扱懐石ハ 利休角切 百合 汁 春きく

碗 若鳥骨附 焼物ハモ 器 志野手鉢 強魚 若筍二 煮込 進め魚 赤絵小鉢二 八寸鮭重製  
青味 中古品 湯葉 生貝 青豆

香の物 茄子 酒器粉引徳利 此の外海老の夫婦羅迄特配せられしは、時節柄にも似  
古漬 唐津の香 杯青磁八角、捻等 ぬお振舞に重分賞味した。

中立は 広間廊下の 銅羅の 引入れにて 花入ハ 不味公作 一重切二 花白鉄仙 水指筒  
構に 再入席

茶人 薩摩 茶杓 庸軒作 茶碗小貴入 建水砂張 已上の道具組にて未し人の手点にて濃  
肩衝 銘郭公 茶を頂く 菓子ハ饅頭であつた

お茶 巡の後 床に 澤筆、緑水青山の 一行は季節に 備前花入に 牡丹、床脇にハ  
広間に動座 庵 適幅 神護経一卷子ツ上

水指 染附葡萄、柳八角 茶人 無地 茶杓 宗和作 茶碗 御本替 干菓子 打もの紅白  
長板飾り 銘松指得 絵唐津 水菓子など

危機 迫る爆撃下御堂の建設、そして其披露茶を催される、未し人の心構へとい、季節に  
適いし道具組にて知人に振舞し嗜みに敬服しながら五時過ぎ帰宅した。

### ○柳瀬山荘の小集

五月二日

P 481

柳荘の 和尚も淋しと見え又もさそい出し、この頃ハ買出部隊も取締厳重で東上線は多少案であつ  
た。縣君から池袋で待合せの通知で正確に待ったが一時間以上彼れは姿を見せず止むなく出掛る

と、前行に三人連を見掛けた。それは縣君に小林古徑 前田青郵君らであつた。馬鹿正直に待ちし  
自分の愚さ、柳瀬に着いたが時間が早いとかで何の用意もない。前日稲木春千里君から奇贈の鶏肉を夫  
人に呈し独り農園を一巡して帰ると

前茶を呈したいとて且座席へ 床に 無準 墨蹟 松浦家 釜 緑 風呂 宗四郎  
師範 旧蔵 口 木地の水指

茶人 金輪寺 茶杓 銘黒白 茶 蕎麦 菓子ハ葛餅 頂き 清談した 墨蹟ハ山澄に長  
裏に清 と朱書 疎安作 碗 蕎麦 にて濃茶を ぐありし物上出来とも見へず

茶碗そは生れは良けれど如何にも疵多く然し良い茶碗であつた。扱食事の用意も出来たと  
母家開炉裡の間に帰ると屏風を構い予の旧蔵

浄弁の短冊 早苗とる云々の季節の歌が掛り 鯛の昆布メ 糟汁 碗 鯛の浜焼ならぬ  
焼置の古物

鯛の塩焼 と云ふ 戦時食、この鯛たるや奥さんの話でハ一週間前から冷蔵庫に入れた物、私は心配して  
八ツ頭ヒジキ いますから、アナタは食のおをよしなさいと中々お住意、見ると紫色に変色している。  
其上下月過ぎの糟汁には、何にしても耳庵翁無茶ぶり、食料不足とて餘りにヒド過る。扱

淡茶迄進られた。離の広間にて

床二 宗達筆 朝鮮飯鍋 水指なく 茶人ハ 茶碗 刷毛目 替唐津であつたが、この刷毛目は  
蓮の横物 に銀瓶 一閑平 茶碗小服 金沢の数寄者旧蔵とて細野老

推薦と聞き、何と云ふ悪物か偽物の大疵、私は辞退して唐津で頂戴した。近來世の様深刻となり  
有産階級程戦々恐々の折 翁ハ全家山荘に疎開されながら其心境や察しられるも、此の不安な交通難

に知人を招きこの振舞ハお氣毒でもあり遺憾でもある。  
何と云ふても翁の近情ハ同情する外なく、身辺より遠かる人の多いに

# 『雲中庵茶会記』 翻刻稿 ⑨

後藤 恒

今回は、仰木政斎著『雲中庵茶会記』全二十冊のうち、第八冊途中の昭和十九年（一九四四）六月から、同冊末すなわち昭和十九年十月までの記述の翻刻稿を掲載する。

この時期はマリアナ沖海戦における大敗、サイパン島の陥落を経て日本本土は米軍の大型爆撃機による空襲の脅威に曝され、戦局はいよいよ切迫する。そうした状況下においても数寄者たちは茶の湯を通じた交遊を続けた。仰木は自庵での茶事のほか、松永耳庵、畠山即翁、服部山楓らの茶事に招かれた時の様子や根津美術館での展覧のこと等を記述している。なかでもやはり多いのが柳瀬山荘における松永の茶事である。交通機関の運行が制限され、山荘へ向かうのも一苦勞であったようだが、仰木は松永からの度々の招きに応じ、都度その時の様子を事細かに記録している。時局への不安に加え、いささか食傷気味であったとみえ、松永の茶に対する批判的な書きぶりも増えている。

（ことつひさし 福岡市美術館学芸課長）

凡例

- 翻刻にあたっては、仰木政斎著・味岡敏雄編の影印本『雲中庵茶会記』（限定版・非売品、平成九年発行）を底本とした。
- 影印本と照合する際の便宜を考え、項目ごとに影印本の当該ページ番号を表示した。
- 漢字は原則として常用漢字に改めたが、常用漢字に含まれない漢字及び一部の人名表記では原文のままとした。
- 変体仮名は現用字体に改めた。
- 踊り字は原則として同音の平仮名表記に改めたが、「々」は原文のままとした。

- 固有名詞の明らかな誤字は訂正した。
- 固有名詞以外の明らかな誤字・脱字や文意が通じない部分は基本的にそのまま表記し、適宜傍らに「ママ」を付すか、註記した。
- 原文において著者により文字の訂正がなされた部分は、新たに書かれた文字のみを示した。
- 原文において補記として傍らに加えられた文字は、丸括弧に入れて行内の該当箇所に入れた。
- 区切り符号の位置は原文のままであるが、文意に沿って翻刻者が句点と読点を区別した。
- 判読不能の文字は■で示し、判読困難な文字については推定したものは□で囲んだ。
- 前号までに註記した事項については、註記を省略した。

## ○井之頭野水庵の茶

六月十九日 昼雨

（影印本上巻の頁番号）

p. 479

戦況ハ益々 不利、本土各地は米機空襲に惨状を呈し、如何に国民苦闘するも挽回の見通しは望めなき迄に逼迫した。我家にも去る六日長男にも赤紙召集令が来り、十二

日に千葉柏部隊に入隊 十五日に家族面会日 翌十六日八第一線に出立と言ふ悲愴な事態 二追つめられると云ふ有様、刻々と迫る情勢に茶の湯所ではない。

五月五日の節句に柳瀬に招かれ、お一家団欒の会食に茶を喫した外中絶している。其の折使はれし、銅の花人は神通から求められたとの事であったが、型は良くても新物の致方なき物、翁もお数寄であるが独断で八時折大疵をされるよふだ。

それよりも水指に、下服薬罐を使はれしにハ一驚し注意して取替を乞ふと云ふ滑稽もあった。扱今 日八井の頭に招かれているので松永さんから途中お寄するとの事で昨日中村君来遊の折珍花を携へ

られたのを、古信楽蹲花人に挿けて待つ。窓外春雨降りしきる中を翁来着され、花ヲ賞玩されたにつき、中村君よりの到来を語ると実ハ昨日十時に電話して、一寸訪ねたいと申込みしに、只今外出かかと断はれて、扱ハこへ来る為の断かと残念がられば、花が良いとて談茶を望マレ盆点で一服差上げ井の頭へ

食料不足に各自軒端園菜に必用の際、其の種や苗にも不自由な時とて、途中井の頭の店頭で茄子や胡瓜の苗を見付たが前約あると困れ漸く四本老母にネタツタが包も物がないので古新聞でもと求めたがこれ又断りしのみか

奥から十七の娘が出て、入れ物がなければお母さん断りなさいとケンモほろろの言葉に、この小娘さへこんな無愛想な言葉つかいをする世の中になつたかと、人心まで廃退し行く不満の内に、店頭で捨てる里芋の葉に包み野水庵に

（479）

## 凡例

- 各論文中の作家名、作品名等については、福岡市美術館の所蔵作品である場合、同館の所蔵作品データの表記にならった。
- 各論文中の著作物については『 』、団体名については〈 〉、作品名については《 》でくくった。
- 註の参考文献については概ね下記の順で表記した。  
日本語論文 執筆者名「論文名」編著者名『著作物名』（出版社、出版年）引用ページ  
欧米論文 執筆者名“論文名”，編著者名，著作物，出版社，出版場所，出版年，引用ページ
- 註の中で、既に挙げた参考文献を前掲書として参照する場合は、前掲書（註番号）引用ページと表記した。

## 福岡市美術館研究紀要 第13号

2025年3月14日発行

編集・発行 福岡市美術館  
〒810-0051

福岡市中央区大濠公園1-6

電話：092-714-6051

印刷 株式会社西日本新聞プロダクツ

〒812-0881

福岡県福岡市博多区井相田2丁目1-60

西日本新聞製作センター

### ■ 表紙写真 ■

人物幾何学文様経緯緋経糸緯糸紋織（グリーンシン）、インドネシア、19-20世紀  
福岡市美術館蔵（一杉コレクション、28-Hd-78）

Geringsing (Ceremonial cloth), design of figure with geometric pattern,  
Indonesia, 19th-20th century

28-Hd-78, Hitosugi Collection, Fukuoka Art Museum





# BULLETIN OF FUKUOKA ART MUSEUM

No.13

---

Research Material: KAI Mihachiro in Manchuria

Drawings and Articles Placed in the Magazine “Kyowa” 7

NAKAYAMA Kiichiro 1

Learning in Art Museums: The Case of Long-term Projects

between the Art Museum and the Junior High School Art Club

SAKITA Sayaka 15

Report: Conservation of (*Title Unknown*) by YOSHIDA Hiroshi

—The Possibility of Restoring Warping under the Museum’s Environment

WATANUKI Yuki 26

Transcription of *Unchuan Chakaiki*—The Tea Gathering Records by OGI Seisai 9

GOTO Hisashi 47

Edited by Fukuoka Art Museum  
1-6 Ohorikoen, Chuo-ku, Fukuoka, Japan